

# Newsletter

February 2009

<http://www.aack.or.jp>

目次

|   |  |  |   |                               |                               |  |                                       |  |             |               |             |
|---|--|--|---|-------------------------------|-------------------------------|--|---------------------------------------|--|-------------|---------------|-------------|
| ロールワリン・ヒマラヤ「ラムドン・ピーク(五九二五m)登頂」<br>—平均年齢六八・五歳の熟年登山隊六名<br>全員登頂の記録—<br>(二〇〇八年一〇月一〇日～二月一八日)<br>阪本公一……………1 | 年金登山事始 二題<br>キリマンジャロ登頂とサファリ紀行<br>トラウマを抜けるとそこは<br>安田隆彦……………11 | OKKAN2008の報告<br>(兵庫県西播磨東山と植松山の山行記録)<br>潮崎安弘……………15 | チヨゴリザ初登頂五〇周年記念<br>シンポジウム講演抄(上)<br>開会挨拶<br>上田 豊……………16 | 高所医学からフィールド医学へ<br>松林公藏……………17 | 南極初越冬とその後の五〇年<br>横山宏太郎……………21 | 雪氷生物学から野生動物研究へ<br>—雪虫からイルカまで—<br>幸島司郎……………25 | 図書紹介<br>『ブッシュマン、永遠に。』<br>松浦祥次郎……………28 | AAACK海外登山・探検助成制度の案内<br>日本山岳協会・山岳共済の案内……………29 | 会員動向……………30 | 訂正とお詫び……………32 | 編集後記……………32 |
|---|--|--|---|-------------------------------|-------------------------------|--|---------------------------------------|--|-------------|---------------|-------------|

## ロールワリン・ヒマラヤ「ラムドン・ピーク(五九二五m)登頂」

—平均年齢六八・五歳の熟年登山隊六名全員登頂の記録—  
(二〇〇八年一〇月一〇日～二月一八日)  
阪本公一

二〇〇八年秋に、ネパール・ヒマラヤに出かけた。目的は、ロールワリン山群のラムドン・ピーク(五九二五m)の登山。メンバーは、京大山岳部の先輩の谷口朗さん(七〇歳)、福本昌弘さん(七〇歳)、伊藤寿男さん(六九歳)、田中二郎さん(六七歳)、元京都山岳会の岡部光彦さん(六七歳)と隊長の私(六八歳)の合計六名、平均年齢六八・五歳の熟年登山隊。副隊長は谷口さんに御願いした。

### 一、ロールワリンについて

ロールワリンとは、チベット語の「Rolwa」⇨「耕す」という語と、「Ling」⇨「場所・土地」から発生した地名らしい。ロールワリンの人びとは、ロールワリンは約一二〇〇年前にチベットに仏教をもたらしたインドの大修行者サドマサンバヴァによって開墾

された聖地、隠れた谷「Beyul」⇨「ベユル」と考えているという。ロールワリンは、エベレストのあるクンブー山域の西隣にある割りりと小さな山塊である。ロールワリンの人びとは、熱心なチベット仏教徒であり現在でも殺生は一切許さないらしい。ロールワリンの中心の村、ベディンヤナは、シエルパ族の住む村で、遠征隊やトレッキング・ガイドの仕事をする人が多い。村の多くの人がカトマンズに別宅を構えており、ベディンヤナの村落には以前の三分の一～四分の一の村人しか住んでおらず、ヤクの放牧も激減しているという。村人の殆どは子供達をカトマンズに住ませて教育しており、ベディンの学校の生徒も現在六名のみ。

### 二、ロールワリンの山

ロールワリンには、八〇〇〇m以上の高山はない。ネパール側の鋭峰ガウリサンカル(七一三四m)とチベット側のメルンツエ(七一七五m)の二峰だけが七〇〇〇mを越える山だが、三〇近くの六〇〇〇mが星のごとく連なる魅力ある山域である。

ロールワリンに初めてきた外国人は、一九五一年のヒラリー隊長率いるエヴェレスト偵察隊であった。その後、一九五二年にスコッ

トランド隊(ビル・マレー隊長)が入り、一九五五年にはシプトン隊長及びグレゴリー隊長率いる二つのイギリス隊がロールワリンを訪れた。一九六四年から一九七一年までは、外国人のロールワリン立ち入りは禁止された。一九七九年にネパール・米国合同遠征隊によってガウリサンカル(七二三四m)が初登頂されたが、翌年の一九八〇年から再度ロールワリンは外国人の入域を禁止した。一九九〇年に登山及びトレッキング・ピーク登頂の許可を取得したグループのみにロールワリンが開放されたが、一般のトレッキングは許可されなかった。そのため、お隣のエベレスト街道と言われているクンブー山域に較べて、ロールワリンは訪れる人の少ない静かな隠れた谷として残されてきた。

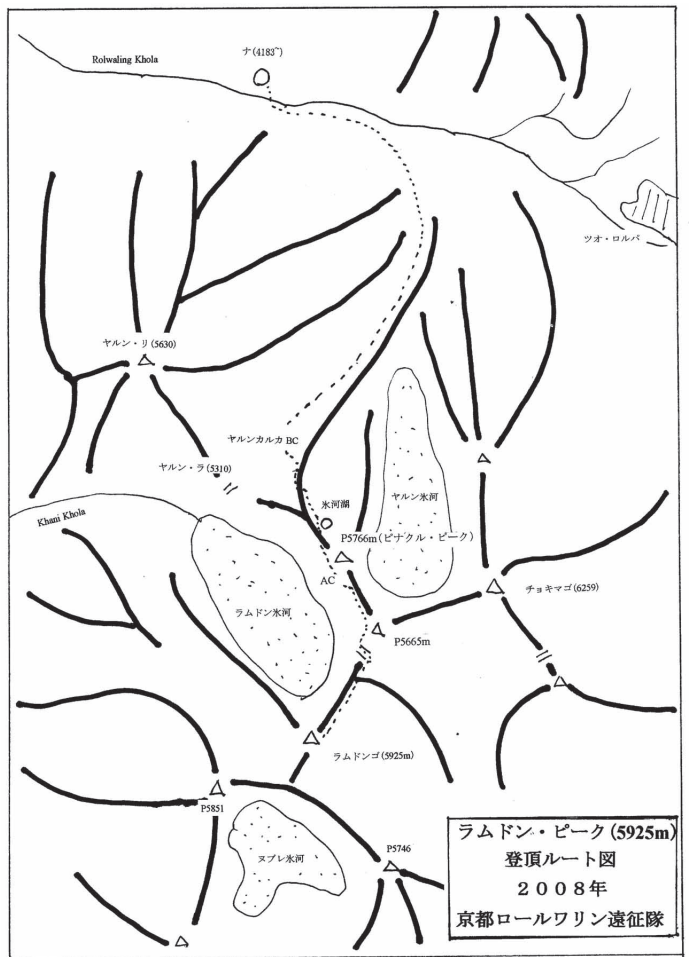
### 三、何でラムドン・ピークを選んだのか？

二〇〇二年秋にNMA(ネパール登山協会)が、ロールワリンのチョキゴ(六二五七m)を含む一五の未踏峰を、二〇〇三年五月以降トレッキング・ピークとして安い登山料で許可すると発表した。その年の六月に四川省の未踏峰ダンチュエンラを登ってきた宮川清明さんと私は、二〇〇三年秋にチョキゴに行こうと検討したが、登攀能力のある若手メンパーが集まらなかったため、結局チョキゴ登山はあきらめた。チョキゴは、二〇〇四年にイギリス隊が挑戦し敗退。その後何隊かがトライしたようだが、二〇〇五年にスイス隊が初登頂した。私はその後は、他の地域のトレッキングや登山に数年ついやしてしまっ

インド。

ヒマラヤに行く前の一昨年、ロールワリンへの憧れが私の心にふたたび沸々とわき上がってきた。背伸びしない

で、七〇歳近い私たちの実力と体力でも安全に登れそうなの六〇〇〇m前後の山に行こうと具体的に検討し始めた。登山者が多くてテント村が出来るともよい。静かな環境のなかで、自分たちの山登りが楽しめるような山に登りたいというのが、私の選考基準だった。ラムドンゴというこれまで名前も聞いたことがない五九二五mのトレッキング・ピークが、ロールワリン河の南、ちようどチョキゴの対岸にあることがわかった。インターネットで調べると欧米人たちはかなり登りに行っているらしいが、日本人は殆ど訪れていないらしい。ラムドンゴに心が傾いてきた。一九八〇年秋にラムドンゴに登頂された大阪



山の会の大西保会長にお会いしてお尋ねしたところ、「暗れていたら向かいのガウリサンカルだけでなく、エベレストやチョーオユーまでの素晴らしい景色が楽しめますよ。そんな難しい山じゃないし、高度順応さえきちんとかれば年寄りでも登れますよ。」との情報を御提供いただき、又親切に地図までもお送りいただいた。大西さんの言葉で、「ラムドンゴに登りに行こう」と私の心は決まった。

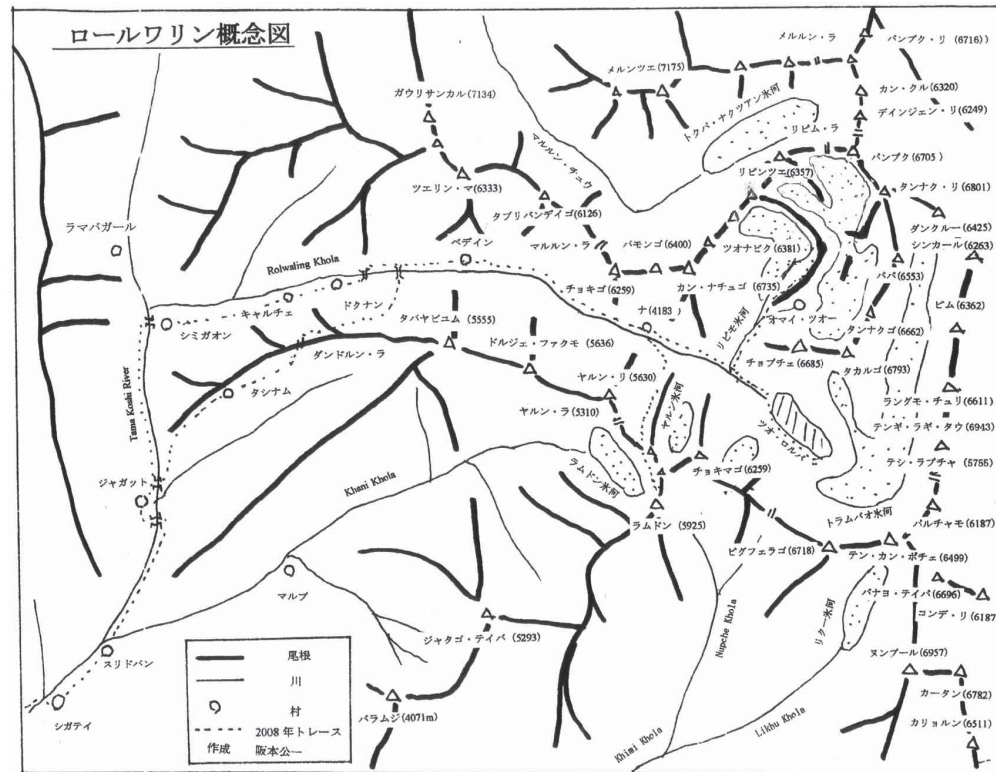
### 四、ロールワリン遠征の準備

ラムドン・ピークは、Ramdung 又は Ramdung Go とも呼ばれる、ロールワリン

河の南側のヤルン峠 (Yalung La 五三〇〇m) の南東約四kmに位置する氷河をいだけ五九二五mの山である。一九五二年にBill Murray隊長が率いるスコットランド隊により初登頂された。

今回 NMA (Nepal Mountaineering Association) より発行された「Climbing Permit」及び登頂後受け取った「Certificate of Successful Ascent」には「Randung Peak, 5925m」と明記されていたので、本文ではこの山の正式名を「ラムドン・ピーク」と記載することにしている。現在、ラムドン・ピーク (五九二五m) はトレッキング・ピークとして開放されており、登山料は四人までのグループでUS\$350.、五〜八人の場合は追加メンバーの登山料は一人当たりUS\$40.、九〜十二人の場合は追加メンバーは費用はUS\$25.と非常に手頃な費用で登れる。私たちの場合は六人メンバーなので、登山隊として支払った登山料はUS\$350. + US\$40 × 二人 = US\$430.であった。そのほかにトレッキング許可書が一人当たりUS\$40.かかる。

力・実力の乏しい熟年登山隊なので、クライング・シェルパ三名のサポートをお願いした。



現地のアレンジは、ロールワリン出身のシェルパやポーターを数多くかかえる Seagull Travel & Tours (P) Ltd. に任すこととした。我々は平均年齢が七〇歳近い体

力・実力の乏しい熟年登山隊なので、クライング・シェルパ三名のサポートをお願いした。

全ての手配を Seagull Travel に任すことにした。六人隊で、一人当たりの費用をUS\$2,050.で契約した。ネパールへ出発する一週間ほど前に、Seagull Travel から連絡が入り、我々の遠征隊のサードは、あの有名なナワン・ヨンデン・シェルパに決まったとのこと。ナワン・ヨンデンさんはロールワリンのナ村の出身のシェルパで、これまで日本隊との縁も深く、カモシカ同人の厳冬期エベレスト遠征隊の時ネパール人として初めて厳冬期エベレストに登頂したシェルパ。その後、日大エベレスト北東稜遠征隊、ロシアエベレスト南西壁隊、日本山岳会東海支部K2西壁隊、同東海支部ローツエ南壁第一次、第二次、第二次遠征隊、そして福岡大学ギャチュンカン遠征隊等々のサードをつとめた五六歳の高名なシェルパ。ナワン・ヨンデンさんのような実力あるサードは、数年前から申し込んでもなかなか引き受けて貰えないそうだが、そんな名サードが我が隊をサポートしてくれる事になり、正直驚いてしまった。シェルパはサードを入れて三名で頼んでいたが、ナワン・ヨンデンさんの実兄のナワン・サキヤさん (ナ村在住、六三歳、エベレスト七回登頂) がラムドン・ピークに詳しいとの事で、ラムドン・ピークをのシェルパとして働いてくれる事になった。私が親しくおつき合いさせていただいている山田良二さん、鈴木幹夫さんや鈴木正典さんが、K2遠征の

時やローツエ南壁遠征の時に世話になったらしく、未だ会ったことがないサーダーのナワン・ヨンデン・シエルパがぐつと身近に感じられた。

## 五、カトマンズからロールワリンへ

一〇月一〇日の真夜中の一時二五分、関空発のタイ航空にてカトマンズへ出発。バンコクで乗り換えて、カトマンズにはその日の一二時四五分に到着。その日の午後は、エージェントと打合せし、翌日はカトマンズ市内をのんびりと観光。一〇月一二日にチャーター・バスに乗って約一〇時間かかってシガテイへ。翌日一三日からジャガット、シミガオン、ドグナンを経て四日目の一〇月一七日にロールワリンの中心地ベディンに着いた。ベディン村の裏にはガウリサンカル(七二三四m)の前山が聳える。一〇月一七日は、休養日。ベディンの裏山の瞑想所へハイキングに行った。崖の絶壁のテラスにへばりついたような小さな瞑想所だ。ベディンの学校の子供達にと、日本から持参した画用紙帖と一〇色入り色鉛筆セット一〇人分をベディンの子供達にお土産として渡すことにした。残念な事に、ちょうどダサインで学校が休みとの事で、先生達には会えなかつたので、サーダーを通じて子供達のいる家族に手渡して貰った。キラキラ光る目で、にっこり笑って「ダンニヤバード(ありがとう)」と礼儀正しくお礼を言う子供達にこちらも自然と笑顔がこぼれる。母親やお婆ちゃんも、嬉しそうに喜んでくれた。たいした事ではないが、

地元の人達とのささやかな交流が出来たような気がした。

一〇月一八日、晴れ。ベディンからのんびり歩いて約四時間でロールワリン最奥の村ナ。ナ村では、サーダーのナワン・ヨンデンさんの経営するロッジ「Rolwaling Mountain Resort・Na」に宿泊する予定だ。このロッジをベース・ハウスにして、ツォー・ロールパ及びリピモシヤール氷河への高所順応ハイキング、及びラムドン・ピークのアタック・キャンプへの偵察も行う予定だ。休養日も入れて一〇日間宿泊の予定。風呂はないが、新しい建物で、部屋もトイレも小ぎれいで、気持ちの良いダイニング・ルームも快適そう。ロッジの前が草の広場になっており、テントや寝袋を乾かしたりしていると、ときどきヤクが遊びにやってくるというのどかな風景。ナワン・ヨンデンさんは、シエルパとして稼いだお金でカトマンズの郊外に一軒家を持つており、又ルクラでも一六室のロッジを営んでいるというロールワリンでも有数の富豪。ベディンやナのゴンパの修復にも随分高額の寄付をしたらしい。彼は六歳頃から五〇六年ゴンパで修行していたらしく、実に敬虔な仏教徒である。実兄のナワン・サキャさんは、シエルパとしての仕事をしながら、ベディンとナのラマとしてゴンパの仕事もしている。由サーダーは、早速近くの民家にテントを張っているトレッキング・パーティを訪れ情報収集。数日前に、ドイツ隊がラムドン・ピークに挑戦したが、雪が深くて頂上には登れずに撤退してきたとの事。ロールワリン河の右岸

のナ村の裏には、左側にチョキゴ(六二五七m)、その右には未踏峰のバモンゴ(六四〇〇m)が聳える。バモンゴは、ネパール側のナ村からはどこからもとりつけそうにない急峻な岩と氷の山だ。ロールワリン河の奥には、名峰チョブチェ(六六八五m)が聳える。

## 六、高所順応(一〇月一九日～二六日)

### 「ツォー・ロールパ、リピモ氷河探索」

私たちは年金生活の熟年登山隊なので、急ぐ旅ではないから、出来るだけ余裕を持った高所順応期間をとろうと、ツォー・ロールパへのハイキングとリピモ氷河の探査行を計画した。一〇月一九日は、ツォー・ロールパの四七〇〇～四八〇〇mあたりまでのハイキング。ツォー・ロールパはネパール最大の氷河湖と言われている。氷河の決壊による被害を防ぐために、世界各国からの調査と支援が行われている。日本からも、名古屋大学の大気水圏研を中心とする氷河学者が何度か調査にきている氷河湖だ。京大山岳部OBの門田勤さんや藤田耕史さんも観測にきたとの記録がインターネットにでていた。六時五〇分にロッジを出発。ナ村のある右岸から吊り橋を渡って左岸の台地へ。なだらかなロールワリン河沿いの道を二時間ほど歩いて、ツォー・ロールパの大きなモレーンの下にかかる橋を右岸に渡る。モレーンの急坂を登ると観測所があるツォー・ロールパに九時三五分に到着した。突然、観測所の方から、ネパール人のガイドが飛び出してきた。「日本人のトレッカーが高山病になって困っている。観測所の無線が使

えないので、衛星電話を持っていたらヘリコプターでの救助を要請するのに使わして欲しい。」との依頼。私達がウエック・トレックからレンタルしたスラーヤ衛星携帯電話を今日はナ村のロッジに置いてきた。今日は高所順応活動の第一日目で大事な日だが、人命にはかえられない。福本さんと私がナのロッジまでガイドと一緒に下山し、衛星携帯電話でヘリコプター救助要請のサポートをした。他のメンバーはサーダー、シエルパと一緒にツォー・ロルパの最奥の約四七〇〇mまで登って午後一六時過ぎに帰ってきた。ツォー・ロルパの上のロッジでガイドと話をした我々のサーダーは、実はあの日本人の客はラムドンに登っていないのだと聞かされたという。不可解な話だ。その日の午後は、福本さんと私は休養日のようなんびりした日だったが、他のメンバーは一六時過ぎにかなり疲れて戻ってきた。四七〇〇mまで登ってきたらしい。高所順応初日としては、十分な成果だ。

一〇月二〇日は、休養とし、のんびりと洗濯したり、寝袋をほしたり。ツォー・ロルパの方へ救援のヘリコプターが跳んでいき、すぐに折り返してカトマンズの方へ帰っていった。あの日本人は、うまく救助されたい。よかったとほっとする。暇な時間をみて、ロッジの裏の滝を見に行く。ロールワリン河沿いに広く開けたナ村全体が見下ろせる。

一〇月二一日、晴れ。今日は待望のリピモ氷河へ入る日。随分大きな氷河なのにこれまでリピモ氷河に入った記録は殆どなく、北大のタンナク・リ(六八〇一m) 遠征隊の報

告書で知るだけであった。未知の部分が多く、非常に興味のある氷河だ。今日は出来たら五〇〇〇m近辺まで登って、リピモ氷河全体の把握をしながら、対岸のラムドン・ピークの状態も偵察したいという欲張った高度順応行動の計画だ。ビスケットと紅茶だけの朝食をすませ、四時四〇分にロッジを出発。ツォー・ロルパへ登る道を途中から外れ、北方の丘を目指して登るとリピモ氷河のモレーンに出た。リピモ氷河は左俣と右俣にわかれている大きな氷河だ。アンナプルナ内院と同じような馬蹄形の広大な氷河。左俣の入り口に、未踏峰のカン・ナチュゴ(六七三五m)、その北隣の六三八一m峰は五万分の一の地図では「Thama Bhanjyan」となっているが、サーダーのナワン・ヨンドンさんは彼等地元の間は「ツォナビク」(Tsonakpuiggo 湖の豆)と呼んでおり、この山も未踏峰の筈だと。左俣の一番奥のリピンツエ(六三三七m)もカトマンズ在住のネパール・ヒマラヤ研究家のエリザベス・ホーレさんによると未踏の山とのこと。その隣のリピムツエ西峰(六三〇一m)は中国側から一九九二年にスロバニア隊が初登頂したが、主峰には登れなかったらしい。

我々はリピモ氷河右俣と左俣の真ん中にある尾根に登った。この中尾根の末端でリピモ氷河は二つにわかれていて、右俣の入り口にあたる所に紺碧の小さな湖がある。地図にはオマイツォーと記載されているが、地元の間は「オミ・ツォミルクの湖」と呼んでいるのだと、サーダーが教えてくれた。右俣

の奥には円錐型の堂々としたタンナク・リ(六八〇一m)が聳え、その南に未踏峰のパ(六五五三m)がつづく。リピモ氷河右俣からは、全くパにとりつけそうにもない。右俣の入り口には名峰チョブチェ(六六八五m)がどっしりと聳えている。チョブチェ南面はもの凄い壁。リピモ氷河右俣に入り、北東壁から初登頂されたらしい。チョブチェ南壁ダイレクト尾根や南西稜は未だ誰にも手をつけられていないのであるうか？チョブチェとパの間にタカルゴという六七九三mの立派な山がある。一九七七年にイタリヤ隊によって登頂されたらしい。リピンツエから大きく曲がって降りてくるこの中尾根は五三〇〇m位までは草つきの尾根で、我々は「若草山」と呼んでいたが、リピモ氷河の左俣から右俣を思う存分眺められ、ロールワリン河対岸のチョキマゴ(六二五九m)やヤルン・リ(五六三〇m)を見渡せる素晴らしい景観を楽しめる尾根であった。しかし、風速二〇m以上の強風が吹き荒れ、油断すると倒されそうになった。中尾根の四九八〇mまで登り、下山した。この日は気がつかなかったが、帰国後写真を整理してみると、この中尾根から撮った写真のチョキマゴの奥にラムドン・ピーク(五九二五m)が僅かに頭を覗かせていた。オマイツォーの南端にナ村の住民達が作った祭壇があり、サーダーのナワン・ヨンドンさんは、米をまき、お御酒をささげて、我々のラムドン・ピークの安全登山を祈願してくれた。充実したりリピモ氷河の探索と高度順応ハイキングを終えて、一六時一〇分

にロッジに帰着した。翌日一〇月二日は完全休養日とした。シエルパ達はテント、ロープ等の装備を点検。私たちは、洗濯したり、寝袋をほしたり、アイゼン、ハーネス等の個人装備をチェックした後、ロッジの隣にあるナ村のゴンパへお参りした。ラマのナワン・サキヤ・シエルパが御経をあげ、登山の安全を祈ってくれた。

## 七、ラムドン・ピーク登頂

第二次高度順応を兼ねて、ヤルンカルカのBC予定地から五五〇〇〜五六〇〇mのアタック・キャンプ予定地へ一〇月二三日と二四日の二日をかけて偵察に出掛けた。この偵察から、ラムドン・ピークに過去三度登頂しているサードの実兄のナワン・サキヤ・シエルパ(六三歳)が同行してくれることになっている。ナガオン手前からヤルンカルカ(四九〇〇m)へ登る道はよく踏まれていて歩きやすい。小さな小山を幾つか越えようと、広い盆地状のヤルンカルカにでた。ヤルンカルカの真南は、五三一〇mのヤルン・ラ、そして南西にヤルン・リ(五六三〇m)。ヤルンカルカは、モンスーン・シーズンの六〜七月は無数の花が咲き乱れ、天国みたいな高原になるらしいが、今は草はすべて枯れ、木枯らしも吹き始めてやや寒々としたカルカだ。カルカの東側の丘の下に、清い水の小川が流れており、キャンプ場としては最高。ナワン・ヨンデンさんは、近い将来にこのヤルンカルカにロッジを建てたいと言う。タマコシ河の発電所が出来たらチェチュットまで車で入れ

るから、ロールワリンにやって来るトレッカーも急増して、ロッジ商売はきつと繁栄するだろうとの読みのようだ。その日の午後は、ヤルンカルカBCでゆつくり休養。先日ヤルンカルカへ上がったイギリス隊は、ドイツ隊の撤退の話を聞いてラムドン・ピークは断念して、昨日ヤルン・リに登って今朝ナ村に下山した。

一〇月二四日、今日も快晴。五時四〇分にBC出発。ゴロタ石の歩き難い小さな丘を越え、その次の尾根の稜線に上がると、小さな氷河湖が下に見えた。その尾根の最上部はヤルン・リからくる岩稜につながる。氷河湖の右上部にある雪面を指して、斜めにトラバースするように下り、そして右手の雪面を指して登る。氷河湖の左手からも行けるが、過去の経験から右手のルートの方がベターとのナワン・サキヤさんの意見。浮き石が多く、又石車で滑りそうな厭な下りのトラバースだが、サキヤさんは非常に慎重にルートを運び、我々を先導してくれた。雪面の手前の岩のところで休息。雪はしまっており、ワカンの必要はないので、岩の下にワカンをデポして、傾斜約三〇度の雪面をジグザグに登る。くるぶし位の堅雪で、最高の雪の状態だ。広い台地の上に到着し、休息(二二時二〇分)。その一段上に、前回のドイツ隊のものと思われるトレースが残っていた。高度は五三五〇mだが、アタック・キャンプはこのすぐ上だからほぼ見通しはついた、今日は無理する必要はないだろうとのサキヤさんの意見で、今日の偵察はこれで終わり今日中にナのロッジへ

降りることにした。シエルパ達は一段上の急な雪面の手前(約五四〇〇m)まで、テント、ロープ、スノー・バー等の共同装備を荷揚げしてデポして降りてきた。ワカン、ピッケルは氷河湖の上の雪面のはじまる地点の大岩の下にデポすることにした。今日は、未だラムドンの頂上は見られなかったが、隊員全員の状態もよく、天気と雪の状態さえ悪くなければ全員登頂も出来そうだと見通しを持つことが出来た。ヤルンカルカBCに一五時〇五分着、ナのロッジ帰着一八時二〇分だった。テントは、次回の登頂日の為に張ったままヤルンカルカに置いて行くことになった。今日はヤルンカルカに泊まって明日ナへ下山する予定だったが、これで一日セーブ出来、二日みていた予備日が三日となって随分と余裕が出てきた。今日まで、悪天なしの好条件がつづいてきたが、天気はいつ崩れるかも知れない。予備日がたくさんあれば、それだけ登頂の可能性は高くなる。

一〇月二五日(晴れ)と二六日(晴れ)の二日間は、登頂前の体調を整える為に完全休養日とした。サードとラムドン登頂スケジュールを打ち合わせる。アタック・キャンプからラムドン・ピークまでは結構距離も長く年寄りには疲れる行程だから、登頂後無理してBCまで降りずに、アタック・キャンプにもう一晚泊してからBCへ降りた方が安全だとサードがアドバイスをしてくれた。彼の意見に従うことにする。

一〇月二七日、晴れ。二度目のヤルンカルカBC行きだから、心のゆとりがある。今日

はBCまでなので急ぐことはない、のんびりと景色を眺めながら休み休み登り、一二時三〇分にBC着。午後は、何度もお茶を飲み、十分な休養をとった。

一〇月二八日、晴れ。そろそろ明るくなりかけた六時四〇分にBCを出発。割りと早く氷河湖の手前の丘の上に八時三〇分着。雪面までのトラバースは何度歩いても厭なところだ。先行していたシェルパが雪面の手前の大岩のところまで動かない。合流して解つたのだが、我々が大岩の下にデポしたピッケルとワカンが、その後の好天で融けた雪の水が流れ込んで凍結してしまい、とれなくなつてしまつていた。一時間かかつて、なんとか全ピッケルとワカンをとりだしたが、私のワカンの片方が折れて使えなくなつてしまつた。雪の状態は非常に良く、今日・明日はワカンを使う必要がなからうと判断し、ワカンは岩の上にデポしてアタック・キャンプに上がることにした。五七六六mのピナクル・ピークの下の急なしんどい雪面を登り終わつて一服(一二時二五分)。雪はクラストしていてくろぶし位までしかもぐらず、非常に歩きやすい最高の条件。しかしこの高度にくるとさすがに歩くペースは遅く、遙か遠くにシェルパ達が先行し、アタック・キャンプを設営してくれていた(一五時三〇分)。標高は持つていく高度計により誤差はあるが、私の高度計は五五五〇m、他の人達は約五五〇〇mとなつていた。隊としてのアタック・キャンプの高度は五五〇〇mに統一しておくことにする。このACからは、遙か向こうに純白の丸いラ

ムドン・ピークが望まれる。振り返るとガウリサンカルの勇姿が空高く浮かんで見える。ACの右手は、ラムドン氷河に切れ落ちていく。ここからラムドン氷河にいったん降りて、氷河上を真つ直ぐラムドンへ向かうルートもあるらしいが、ヒドン・クレバスが多くて非常に危険であり、この氷河ルートは避けるべきだとのナワン・サキヤさんの見解。傾斜がきつく且つ稜線からは雪庇がでていて、左手のピナクル・ピークの稜線が上がつてしまつた方が遙かに楽で安全なルートらしい。距離的には随分遠回りになるようだが、経験豊富なサキヤさんの意見に従う。ラムドン・ピークについては、サーダーもこの山をよく知っているサキヤさんに全てまかせているようだ。

一〇月二九日、満天星空の快晴。午前一時に起床し、紅茶をわかし、ラーメンを食べて準備をしていると時間はあつという間にたつてしまう。三時一五分アタック・キャンプを出発。サキヤさんと若いダワの二人が、ピナクル・ピークの稜線への傾斜ある雪壁へルート工作に先行する。サキヤさんは、真つ暗な中をもの凄い勢いで、アイゼンのツアックで登つて大岩の下にスノー・バーを打ち込む。そこから約二〇m程右にトラバースして雪庇が一番小さい箇所を乗つ越した。サキヤさんとダワがフィックス・ロープを設置すると、すぐに私を先頭にメンバーがつづいた。早朝の出発間際に、この傾斜のきつい雪壁をユマールで登るのは息が切れてしんどい。稜線にでると尾根は暫くは瘦せたナイフリッジ

となつて緩やかに東の方に降りている。尾根を降りきると、弥陀ヶ原みたいに広大は雪面となる。ところどころブレイカブル・クラストになつていて、ときどき膝くらいまでもぐり込むこともあるが、サキヤさんがうまくリードしてくれて、出来るだけクラストした雪面を果てしなく歩き続けた。六時過ぎ頃から、空がしらみはじめ、ラムドン・ピークの頭に朝陽があたりだした。すぐ近くのように見えるが、ピークはなかなか近づかない。頂上には左手の北壁を真つ直ぐ登るとのサキヤさんの説明。右手に回り込んで肩にでるルートは、傾斜が緩くて一見易しそうだが、クレバスが多くてかえつて時間がかかり危険だとのサキヤさんの意見。サキヤさんとダワが、又先行して北壁のとりつき点のすぐ上にスノー・バーを打つてフィックス・ロープを張つてくれた。私たちが北壁の下についた時には、既に五〇mのフィックス・ロープを二本設置完了していた。もの凄い馬力とスピードだと感心する。サキヤさんはアイス・クライミングにたけており、各隊が代表選手を出してルート工作するエベレストのアイスフォール隊のリーダーとして何度も活躍したベテランだそう。私たちは、ユマールを使つてフィックス・ロープを登つた。ラムドンの頂上直下の斜面はそれほどきつくないが三五〇四〇度くらい。サキヤさんが「フィックスはどうしますか」と聞いてきたので、「私たちは年寄りでバランスが悪いから、これもフィックスを張つて下さい」と御願ひした。安全登山の為には、いいかっこをしたり、恥ずかしがる



チヨキゴ (6257m)



ガウリサンカル (7134m) 遠望



ナ村から眺めるチヨキゴ (6257m、左) と  
バモンゴ (6400m、右)



チヨブチェ (6685m)



カン・ナチュゴ (6735m、左) と  
未踏峰のツオナビク (6381m、右)





ラムドン・ピークを望む



リピモ氷河右俣。タンナク・リ (6801m、左) と未踏峰のパパ (6553m、右)



ラムドン・ピークへのアタックキャンプ



リピモ氷河全貌

ことは何も必要はない。ラムドン・ピークの頂上はテニス・コートのような広い台地になっていた。六名の隊員全員、サーダー、サキヤさん、若いダワとチョンビの全員が揃ったところで、一緒にピークに立った。頂上到着は九時五分だった。握手と抱擁。感激の一瞬だ。ガウリサンカルからシシヤパンマ、ランタン・リルンが望まれる。リピモ氷河周辺の山々、テングラギ・タウの向こうのクンブーの山々、そして東南には鋭鋒ヌンブールが聳える。素晴らしい景観だ。大阪山の会の大西さんからラムドンからの眺望は天下一品と聞いていたが、その言葉に偽りのない最高の景色だ。天候に恵まれたこと、サーダーはじめ素晴らしいシェルパのサポートがあったこと、全てに感謝したい気持ちで頂上での喜

びをかみしめた。あつという間に時間がたち、記念写真を撮って下山開始。「折角頂上に登ったのだから、事故のないように降りましょう。」とお互い戒めあい、フィックス・ロープの箇所は懸垂下降で安全に降り、北壁の下へ。そこからACへの帰路は、本当に遠かった。全員六名が登頂出来たことは、隊長の私には何よりも嬉しいことであり、何度もラムドン・ピークの頂上を振り返りながら、のるのろとACへ戻った。いつこんな時間に早くたつたのかと思うほど、私たちの歩みは遅くAC帰着は一四時五〇分だった。一時間半の行動でさすがに疲れ切って、夕食までに全員一眠りした。サードは「明朝、テントやロープの荷下ろしにポーターをよこすから」と言って、休憩もとらずにBCへ一人で降りて行った。もの凄い馬力だ。

一〇月三〇日、晴れ。昨日の頂上アタックでさすがに全員疲れ、七時頃までぐつぐつと眠った。ゆつくりとした朝食をとり、テントを撤収して九時三五分にACを出発。六、三歳のサキヤさんも四〇kg以上はあるかと思われる荷物を担いでいる。サブザックだけで歩く我々隊員も手伝うべきだったかも知れないが、体力のない悲しさ、手助けするすべもなく、シェルパの後姿を見ながらノタノタと雪面を下るだけであった。氷河湖からゴロタ石の浮き石の多い急斜面のトラバースは、疲れた身体には大変きつく、休み休みしながらよたよたりとBCにたどり着いたのは一五時だった。一〇月三十一日、晴れ。のんびりと七時頃まで寝て、九時にBC出発し、一二時に

ナのロッジに帰着。やはり屋根のあるロッジは暖かく落ち着く。これまでの禁酒がとけて、夕方からロキシードとウイスキーで乾杯。全員登頂を祝い非常に盛り上がった。ナワン・ヨンドンさんは、下山はベディングからデンデン・カルカを通って、ダンドルン・ラ越えのカルカからカルカを巡る素晴らしい景観の道から、タシナム経由でジャガットに降りようとの新提案を出してくれた。このルートはときどきヨーロッパ人のトレッカーが歩いているが日本人隊は未だ誰も歩いたことがない筈だとのこと。全員サードの意見で大賛成で、デンデン・カルカ経由の迂回路をとることに決定し、登頂後のロッジでの晚餐は大いに盛り上がった。十一月一日は完全休養し、十一月二日からダルドルン・ラを越えの道を通り、のんびりと六日かけてシガティンにおり、十一月九日にチャーター・バスでカトマンズへ戻った。二九日間のロールワリン遠征は、これで無事に終了した。

今回は、他の隊員はネパールが初めてなので、その後カトマンズ、ポカラでの観光を楽しみ、日本に帰国したのは十一月十八日だった。

今回のロールワリン遠征は、平均年齢六八・五歳の六人全員がラムドン・ピーク（五九二五m）に登頂出来、非常にラッキーであり、私たちにとって最高に素晴らしい結果だった。技術的には難しい山ではなかったが、BCから頂上までの距離が非常に長く、

年寄りの私たちにはかなり厳しい登山であった。全員の体調が大変よかったこと、又高度順応タクティックスがうまく行き誰一人深刻な高度障害にからなかったこと、そしてナワン・ヨンドンさんという素晴らしいサードを得、豊富な経験と実力を持ったナワン・サキヤさんという優秀なシェルパのサポートがあったこと、そして何よりも天候に恵まれたことが全員登頂に結び着いたものと思う。全員無事に登頂出来たことは、隊長の私として何よりも嬉しかった。登頂後、BCからナへ下山するとき、一緒に歩いているサキヤさんが、こんなコメントをしてくれた。「バラ・サブ、ウォーク、ベリー・ビスタリ、ビスタリ。ソ、エブリボディ、キャン・ゴ、イン・オーダ。イツツ、ベリー・グッド（隊長が非常にゆつくり歩くから、皆が乱れずに一緒に歩くことが出来て、大変よかった）」。

ポカラでの観光を終えてカトマンズに戻ってきてから、ナワン・ヨンドンさんから電話を貰った。全員で自宅へ遊びに来て欲しいとの招待であった。御家族にご迷惑をかけるのは避けたいと、どこかのレストランで私たちが夕食を招待したいと申し出たが、「是非是非我が家に来て下さい」との強いお誘いを受けて、ナワン・ヨンドンさん直々のお迎えのタクシーで、サードの自宅へ出掛けた。サードの家は、カトマンズ北方の郊外住宅地に建つ緑の芝生の庭のある素晴らしい瀟洒な一軒家だった。奥様の手料理で昼食をもてなして下さり、恐縮してしまった。手作りのドブクを飲みながら、次々とでてくる料理

を御馳走になった。「ウイスキーもどうぞ」と新しいスコッチの瓶が開けられ、「マア一杯」「もう一杯だけ」とすすめられる。奥さんの手作りの大きなデコレーション・ケーキまで出てきた。ケーキには「2008 NEPAL・JAPAN FRIEND CLIMB」と私が頂上用の旗に書いたのと同じ文言が、クリームで書かれていた。ナワン・ヨンデンさんに、丁寧に敬礼を申し述べたところ、次のような言葉がかえってきた。「今まで、随分たくさん遠征隊で山に登りました。年輩の方が登頂され

## 年金登山事始 二題

安田隆彦

### キリマンジャロ登頂とサファリ紀行

卒業後山にはほとんど行かず、わずかに冬の笹ヶ峰合宿にしばらく参加していた。それも家族が出来るで行かなくなり、年に一度の新年会だけ顔を出す影の薄い会員。四〇歳でテニスに巡り合いその面白さにひかれてのめり込み、退職後は世界マスターズ戦に出ることを夢にしていた。ところが松浦祥次郎コック宅にて御馳走になった折、同席の泉谷洋光イッセキより崑崙初登頂の話聞き感動。まだ六〇〇m級の未踏峰は若干残っており次の機会に同行を勧められ、急に体が熱くなる。テニスのやりすぎで右膝を痛め、山に登ることなどすっかり忘れていた。しかしテニス用

ることもありましたが、今回のように七〇歳近いメンバー六人が全員登頂されたのは、私の遠征経験で初めてです。こんな素晴らしいことはありません。皆さんと同じように、私も非常に嬉しいのです。おめでとうございませう。」との暖かい言葉をいただき、ネパール帽子のプレゼントまで頂戴した。全員が、胸がジンとなるほど心から感動した。ナワン・ヨンデンさん宅での素晴らしいパーティは、今回の遠征隊の隊員すべてにとつて、いつまでも忘れられない思い出になるであろう。

の体づくりに少し加味すれば山にも行けるかもしれないと、まずは整形医に指導を求め、強化トレーニングをスタート。

ボケ会の丹沢山歩きに恐る恐る参加する。ほとんど膝の影響なく丹沢の美しさにすっかり魅了される。昔のように山にゴミが落ちていない上に、自宅からわずか一時間半ほどで緑いっぱい山、まるで自分の庭のよう。こんな近くに住んでいて今まではまさに宝の持ち腐れ。膝強化開始半年後、思い切つて浅間山に登ってみるとあれだけ心配したのがうそのように痛みなし。二日後再度登つても同様。これならさらに目標を高めて大丈夫とキリマンジャロに登ることを泉谷と合意。年齢のことと残された短い年金生活の充実感を考慮して計画を立てた。要点は三つ、日本からの時差解消のためタンザニアに入る前に一週間アムステルダムで芸術に浸る。キリマンジャロは通常の日数五日間より大幅にゆつく

りし、九日間かけて登る。帰りは世界三大観光地の一つセレンゲティ・ウゴロンゴロでサファリをたっぷり楽しむ。出発までの一〇ヶ月間、月一回の割で丹沢、奥秩父で足慣らしをし、最後は富士山山頂で宿泊し高度順応をした。

二〇〇八年六月一六日

日本発 アムステルダム泊。町中心部すぐそばの閑静な運河沿いのワンスターホテル。建物は一六四四年建造、内部は改装され、個室でシャワートイレ付の小さいながら快適な部屋。八日間滞在中の主な行動は

キャナルクルーズで町を眺めた後市内散策  
電車でアルクマールまで行き、オランダの名産チーズの市場取引を見る  
ゴッホ美術館にて、ゴッホの生涯の作品を年

代順に鑑賞

サイクリングでザアーンズ・スカンスに行き  
風車の風景を見る

国立美術館にてレンブラント、フェルメールを堪能

国立音楽劇場にてメシアン作 オペラ・アシジの聖フランシスコを鑑賞

電車でデンハーグに行きマウリッツハイツ美術館のレンブラント、フェルメールを鑑賞

帰路ライデン大学にてシーボルトの植物園を見る

コンセルトヘボールにてムソルグスキーの展覧会の絵、シューマン交響曲一番 春 鑑賞

美術館も半日かけて休み休み、主要なもの

のみ見て回ると堪能できる。オペラは近代作曲家の巨匠メシヤンの生涯一作の大作。オーケストラ一〇人、合唱団一〇人のスケールに圧倒される。夢舞台コンセルトヘボウを楽しんで夕べは心の温かみを満喫。

## 六月二四日

アムステルダム(一〇時二〇分発)よりタンザニアのキリマンジェロ空港(一九時四五分着)までノンストップ八時間二五分。ここより村山正康ベコさんとその友人松本正人氏に加わり四人チームになる。

出迎えは Kilimanjaro Crown Bird 社。日本人がからむ旅行社は料金が高いので欧州人相手の会社で、中規模以上、メール反応の良い会社をたくさんの中から選んだもの。ちなみに料金は、登山一日一人 10\$ (入園料、小屋宿泊料、保険料、三食と飲料水、ガイド二人、コック二人、ポーター九人、送迎費用)。サファリ一日一人 15\$ (入園料、テント宿泊料、三食と飲料水、ガイド兼運転手とコック、サファリカー)。一日単位の明朗会計。

## 六月二五日

キリマンジェロ公園入り口 一一:三〇 am  
標高一七九〇 m 気温二一・六度  
マンダラ小屋 一六:〇五 pm  
標高二七二〇 m 気温一一・〇度  
標高差九三〇 m 延長八 km  
所要四時間三五分

キリマンジェロ登山の七割の人が利用する表街道マンダラルートをたどる。熱帯雲霧林

の中に整備された美しい歩経路。アジア熱帯雨林の中で生活の長い村上、泉谷は両地の林相比較論に話題が尽きない。

ダイアモックを飲み始める。副作用で夜中のトイレが六、七回、腸の弱い人は下痢。対策として飲みはじめを早朝にし、初期の頻繁なトイレタイムを昼間に済ませる、腸の弱い人はビオフェルミン(二錠併用すると良さそう)。

## 六月二六日

マンダラ小屋 八:三〇 am  
標高二七二〇 m 気温七・四度  
ホロンボ小屋 一五:五〇 pm  
標高三七二〇 m 標高差一〇〇〇 m  
延長一五 km 七時間二〇分

富士山裾野の数倍の規模のなだらかな斜面一杯に高山植物が咲き乱れるお花畑の中の極めて緩やかな坂道。荷物はポーターが持つてくれ、サブザックの中はカメラ、水、セーターのみ。快適な気温で汗もかかず、美しい庭園内の散策気分。

ガイドの Hamady はポーターを三年経験後ガイド学校で一年勉強して資格を取得後、正式ガイドになってから四年目、花、鳥の名を良く知っている。四人の客をサポートする合計一三人の現地チームを良くまとめている。

## 六月二七日

ホロンボ小屋にて余裕の休息日、近くを三時間ほど散策。食事はいつも前菜、スープ、メインディッシュ、デザートと形は満点、サー

ビス満点。ただし栄養、味はぎりぎりの合格点。

## 六月二八日

ホロンボ小屋 八:二〇 am 標高三七二〇 m  
気温三・二度  
キボ小屋 一五:一五 pm 標高四七三二 m  
標高差一〇一二 m 延長一三 km  
六時間五五分

前半は引き続きお花畑の中、雪で輝くキリマンジェロ山頂の移りゆく形の変化を楽しむ。後半は乾燥地帯でやや埃っぽい道、マエンジ峯(四一〇〇 m)の鋭い鋸型の岩峰が猛々しくそそり立つ。剣岳の八ツ峰とは比較にならない鋭い岸壁と高度、ロッククライマー達の難度に思いを馳せながら緩やかな登り道を歩く。

## 六月二九日

キボ小屋 三:〇〇 am 標高四七三二 m  
気温マイナス二・八度  
ギルマンズポイント 八:三〇  
標高五九〇 m 標高差九四二 m  
五時間三〇分

ウフルピーク登頂 一一:一五  
標高五八九五 m 標高差二〇五 m  
延長二 km 二時間一五分  
ウフルピーク発 一一:四五 気温三・八度  
キボ小屋 帰着 一四:四〇 pm  
所要二時間五五分 往復合計一時間四〇分  
ホロンボ小屋 一八:三〇 所要三時間

他のパーティーは午後一時頃から出発を

はじめ夜半一二時には全て出払う。我々のみゆつくり出発。小屋から外輪山に向けいきなり急な登りになり、月明かりのない暗闇をガイドのペースでゆつくり登る。途中で日の出、気温マイナス四・五度。この頃より先行した登山者で調子を崩した者が青い顔をしてガイドに抱えられパラパラと降りてくる。最後は見上げるような急登だが足場はしっかりしている。外輪に出たギルマンズポイント（五六九〇m）で村上、松本は引き返す。火口を回り込むようにして外輪山をキリマンジェロ山塊最高峰のウフルピークに向かう。すぐに雪渓が現われ、軽アイゼン・スベラーヌで快適に登れる。突然巨大氷河が現れる。安仁屋報告書であらかじめ知識は得ていたの



登頂後ホロンボ小屋にて、左から安田、松本、村上、泉谷

にその重厚さに感動。ピークはみずばらしい板きれだけ。他の登山客がすべて降りた後の静けさ、計画してからわずか一〇カ月で到達したアフリカ最高点をゆつくり楽しむ。体調は万全で一度もしんどい思いもせず、楽々の登頂。泉谷の分析では今回の高度順応が極めて良好なのはアプローチが極めて長く、それをゆつくり歩いて登ったことが良い結果をもたらした。

#### 六月三〇日

ホロンボ小屋にて休息。遙か彼方にキリマンジェロ山頂を遠望しながら余韻を楽しむ。各小屋の規模 マンダラ 八四床、ホロンボ 一四八床、キボ 五八床。

トイレの清潔さが日本の山小屋とは格段の差。マンダラ、ホロンボなどは水洗式。キャンプ地全体にゴミはほとんどなし。

#### 七月一日

ホロンボ小屋 七二二〇 am

公園入り口 一四二二〇 pm 所要七時間

この登山ではサポートチームに対するチップの問題がある。終了時費用の約二〇％に近い要求があった。しかし欧州人用ガイドブックに習い最初七・五％で提示し、最終一〇％で納めた。すべてが終わり落ち着き先のキーズホテルの庭先で祝杯のビールを楽しんでいたら、突然霧が晴れて二本の大きなヤシの木の間に夕日に映えるピンク色の山頂が忽然と現れ、思わず大歓声。

#### 七月二、三日 休養 朝の気温一九度

七月四〜一〇日 アルーシヤ、タランギーレ、マニヤラ湖、セレンゲティ、ウゴロンゴ国立公園

五か所の国立公園めぐりでたくさん動物たちを見る中、ハンティング現場も二回目撃。最初はライオンのガゼルハンティング、司令塔の一匹がガゼルより十分遠いところであらぬ方向を向いてじっとしている。ガゼルの気をそらしているのか。他の二匹が左右にわかれて草むらの中を抜き足刺し足で近づいてゆく様子が圧巻。突然司令塔が立ち上がったと思ったらガゼルに迫っていた他の二匹も立ち上がる。きつとガゼルに気づかれたから諦めたのだろうか、なぜそのことを察知したのか。ガゼルは逃げ始めたわけでもなく、同じ場所ですべて草を食んでいる。また駄目なことを三匹がどのように連絡しているのか不思議だ。司令塔のライオンがその後我々の車にまつすぐのつしのつしと歩いてきて窓際まで来た時には思わず体をすくめた。カメラをのぞいていた泉谷は画面一杯のライオンの顔、突然目と目がバシッと合って息が止まる。

豹のハンティングも目撃した。バッファローの一群が水場に近づき、川岸の斜面を下りはじめた時、突然藪の中から豹が出てきて群れ中央の子供めがけて飛びかかろうとする。すかさず親が角で防衛し追い払う。一瞬の出来事で目撃できた人は少数。

七月一二日 成田帰着 お楽しみタイムが終

わつたとたん灼熱の日本にグロッキー。

しかしこれから少なくとも一〇年は年金生活者らしく時間の余裕をタップリとつた山登りと少しだけ贅沢な芸術文化鑑賞の旅をゆつくり楽しむことができる嬉しさがこみ上げてくる。

## トラウマを抜けるとそこは

最後にスキーをしたのは一〇年ほど前。杉の沢のべべ小屋で美食、美酒と共に楽しんだ。しかし平井ポコさんが三田原スキーで足を折りヘリコプターで救助され、京都までタクシーで帰ったとの話を聞いてから急にスキーへの興味が失せた。民間企業にいてスキーで怪我したら万事休す、骨折のトラウマが変じて年取ったらスキーは止めるものとの認識が定着していた。

年金生活に入り、山歩きを再開し、崑崙遠征隊に加わることができた。遠征用の訓練に冬山と氷壁訓練に加え山スキーもするのとこのとで止む無く山スキー道具一式を新調した。すぐにポコ兄に連絡すると年末に笹ヶ峰に入って現役と交流し乙見峠を越えて小谷温泉に浸かりに行こうとの提案。泉谷イッセキ兄にそのことを話すとそれならと出発一〇日前に急遽スキー一式購入してジョイン。イッセキ兄がジャカルタとシアトルにいるとき、両地にポコ兄が訪問し歓談したがそれ以降会っていない。懐かしさ余りの衝動買い、二〇年ぶりのスキーになる。彼にもトラウマがあり年取ったらスキーは止めるものとの既成概念

を、懐かしさで一瞬忘れての出来事。

笹ヶ峰に入る前に足ならしをしようと思成二〇年一月二七日より杉の原グレンデに向かう。妙高高原駅に下車したのは二〇余名ほとんどがあるホテル出迎えの一台のバスに乗り込み我々と他に客一人だけ駅前に残された。昔のようにタクシー待ちの行列もなければバスに争って乗る客もなくガランとしている。駅前の観光協会の事務所にバスの時間を聞きに行くと次は一時間二〇分後とのこと。タクシーを呼んでもらうと出払っているからしばらく待てとのこと。二〇分ほど待たされた。杉の沢に着いてコンビニで買い物をするとうとしたらこの村にはないとのこと。わずか一〇年で大変なざびれようだ。

グレンデだけは昔と同じ雪でほつとする。ポコ兄は相変わらずのオールドボーゲンスターイルでお不動様の滑り、イッセキ兄は踏み変えが早く、なめらかな滑りに見えるのだがコケ頭、安田は当初慎重に滑っていたが慣れてくると昔の癖が出てスピード狂、ゴンドラの上から下まで一気滑りで六分台、安全を見て昔より一分ほど遅い。ゴンドラ待ちの客がほとんどいないので一時間に三本、三時間で九本滑る。

そこで一句

四キロを 六分で飛ぶ 初スキー 隆彦

京山荘は営業をしていないので止む無くペアーリフト近くの民宿秀雲荘に泊まる。若者

用の民宿で宿泊食事システムが効率よくできていて、すっきりしている上にはちきれんばかりの客の若さに感化されてこちらも若返る。

二月二九日 現役から四時間遅れで歩き始める。雲一つない真つ青な空、雪をかぶった木々や黒姫山、高妻山、天狗原山、焼山が次第に現れるさまを眺めながら白銀に付けられたシュプールの上をポコポコと歩いているとまさに至福の時。

こんな素晴らしさを再開できたいろんな偶然に感謝感激。

そこで一句

活活と 雪原合宿 青春時代 洋光

歩くことが快適そのものでも、そこは年金登山、何をするにもヨイショ、数分ごとにアシンド、足が痛い、腰が痛い、手頸が痛い。トリオの合唱が美しい雪原に流れる。

そこで一句

ドッコイショ イタイイタイと ヒュッテ入り 一正

現役は合宿中は禁酒なので現役との交歓も威勢のいいものにはならなかった。しかし少数人数山岳部の苦勞や楽しみをじっくり聞くことができた。

二月三〇日 現役が三田原山に登るのを早朝見送る。ガバガバと足を出す歩幅が、

見慣れた年金組みのものとは大いに違う。当初は乙見峠越えも一案にあったが、居合わせたグズラ、マッコウ、ケイハクに、雪崩の巢に向かつて行くとはなんたることと一蹴される。もともと多少無理な工程に思えたので半ばヤレヤレと安堵した気持で真っ直ぐ来た道を、トラウマを乗り越えたうれしさで胸ふくらませながら白銀の中を帰る。

帰路京山荘を訪れたポコ兄は妻を亡くした事を語ると、おかみさんより仏前にといつて一本進呈される。

しばらく歓談して辞す前　ところであなたはどなたでしたっけ　と聞かれてギャフン。

## OKYAN2008の報告

### (兵庫県西播磨 東山と植松山の山行記録)

潮崎安弘

毎年の恒例、OKYANは今年で十二回目、昨年十月二五～二六日に兵庫県西播磨の東山(一一〇六米)と植松山(一一九一米)に登り無事終了した。参加者は昨年と同じ二五名、今年初参加の清水節郎氏が関東から、又おなじみ米子から藪内ラシヨール氏夫妻、福岡から野村オド氏が駆けつけてくれた。

第一日目の二五日はJR姫路駅に集合のあと、専用バスで揖保川上流の宿舎、東山温泉

フォレストステーションに向かった。車中ではこの地に詳しい川崎アワモリ氏の講話があつて、この地域のたたら製鉄の歴史や植松山登山口の岩野辺地区の地名の由来などについて、播磨風土記の記述を参照しながらのお話を伺った。ステーション到着後は中庭屋外で昼食のあと一旦荷を置いて東山の登山開始。ぶなの黄葉が輝く林道を、落ち葉の音もかさかさとして道を辿ること二時間弱で全員山頂に到着。折からの申し分なき秋晴れで周囲の眺望極めて良ろしく、西播磨の山々の遠望を楽しむことが出来た。

翌二六日は予想に反して朝から雨模様。しかしそうひどい降りでもないので予定通り植松山に登ることとし、所用で朝帰りされる中島ダンナ氏、松井サルタン氏を除いた二三名が専用バスと二台の個人車で出発した。バスは県道四二九号の登山口分岐点までしか行ってくれないので、これに乗った人は降車後林道の歩き約三十分で登山口到着となる。一方車組は登山口まで車で入ったあと、バス組を待つ事なく先行出発。のんびり歩いて後発のバス組が途中で追いつくことを予定しての段取りだったが、これが後で一寸したトラブルの種となった。

登山道はまず谷沿いに約一時間半程歩いたあと、山頂に続く尾根に取っ付き急坂約四十分の登りで山頂着となる。大人数のバス組はこのルートを通り、登山口から二時間余で山頂に到達したが周囲は霧で何も見えない。雨は止んだが昼食はある程度下った所でし、

ヤッホーの雄叫びだけで早々の下山とした。一方先発の車組は、登山口から谷沿いに四十分程の分岐点に設置された新しい標識を見て距離の短い尾根筋ルートを取ることにした。この標識は前年十一月の偵察時には無かったものだが、地元の方が新道を完成させたと思ひこれを探ろうと選択したものである。しかしこの道は約一時間登ったところで途切れ、そこから先の登山道を発見できなかった。天候も悪く幸いバス組とのケイタイ電話の連絡も取れたので、ここで撤退することにした。

このように今回は二つに分かれた別行動になったがそれぞれ宿舎に帰り、入浴後は暫し



東山山頂の全員写真

の間の歓談も慌しく、再び専用バスで姫路に帰り解散となった。

なお後日地元宍粟市の観光課に抗議の電話をした結果、地元のボランティアグループが山道の完成を待たずに標識を設置したことが判明した。

最後に今や恒例となった第一日日夜の懇親会で、二名にお願いした旅行体験のご講演の内容を紹介し、プレゼンターへの感謝に替えることにした。

まず酒井オシメ氏が三大洋周航の旅。厳寒の一月三万トン級のクルーズ船で横浜港をたつて太平洋、インド洋を経て喜望峰から大西洋、南米の南端から南極半島まで南下したあと再び太平洋。横浜に帰ったのが春も深まった四月、一〇八日間の船旅を計一六〇枚のアルバムに纏められた。

## チョゴリザ初登頂五〇周年記念 シンポジウム講演抄(上)

### 開会挨拶

AACK会長 上田 豊

一九五八年のチョゴリザ初登頂は、その際の三座を含め、京大隊として一四座の初登頂を、のちの三〇年で生みだしました。チョゴリザ初登頂が実現した五〇年まえ、当時の皆さんの状況は、年代により様々だったと思

次いで寺本シヨウチャン氏の北欧最北端オーロラ旅行記。一月フィンランドのヘルシンキから飛行便と陸上便で、ノルウェイ北極圏の町トロムソへ。旅のハイライトはここからヨーロッパ最北地点ノールカップ岬を目指すクルーズ船の旅。大阪帰国までの八日間、太陽の上からぬ北極圏の暗闇の写真を纏められた。

今年の参加者は、中島ダンナ、井上トツキユ、寺本シヨウチャン、平井ポコ、青野オンビキ夫妻、酒井オシメ、松井サルタン、藪内ラシヨウ夫妻、新井夫妻、川崎夫妻、\*高村デルファー、岩坪ゴロー夫妻、川嶋オレッチ、\*潮崎パイマン、高野ゴジラ、\*井関、宝田ホーデン、中野、野村オド、清水ムスコの各氏。幹事は昨年と同じ\*印を付す三氏が担当、又川崎氏にはアドバイザーとして多大なご協力を戴いた。

ます。

わたしの例をお話しますと、当時はまだ中学生でチョゴリザの記憶はなく、高校生になってノシヤック初登頂の新聞記事が印象に残っています。京大が初登頂をやった、また当時の受験雑誌にも探検大学と紹介されている、これはぜひひでも京大へ、と思いました。

山岳部に入ったのはサルトロ・カンリ隊の出る年で、準備するチョゴリザ経験者を見ることもできました。登頂者の平井さんなどは、雲の上の妖精みたいに輝いて見えました。桑原隊長の本や公式報告書でも、チョゴリザ登

頂の刺激に浸かりました。

その桑原さんの『チョゴリザ登頂』のはじめの方に、隊長になってくれと二日前に要請したばかりの今西さんが、新調のレーンコートにベレー帽、双眼鏡を斜めにつけて、初のアフリカ調査にさつそうと旅立ったことが書かれています。さらに、日本初の南極越冬を終え『宗谷』船中にあつた西堀さんから電報をもらい、元気づけられたとあります。

チョゴリザは高みを目ざす垂直志向、南極は地平の彼方を目ざす水平志向、アフリカは未知の茂みにわけいるフィールド志向の対象といえるでしょう。何かが起きる時、まとまって連鎖することがよくあります。五〇年まえ、パイオニア・ワークの三つのスタイルが一気に絡みあい、新しいステージが渦のように展開しはじめたような気がします。

その後の五〇年間、AACKとしての活動があり、また京大の登山・探検の伝統で育つたOBたちが外に出て活躍し、幅広い成果が生み出されてきました。それらは、この記念シンポジウムの話題の中心になるでしょう。さてチョゴリザ登頂から五〇年が過ぎ、

一九三二年に誕生したAACK、また同年生れのチョゴリザ登頂の平井さんも、今年が喜寿の年にあたります。いまAACK会員の平均年齢は六十代後半です。五年か一〇年後には、その平均年齢は後期高齢者の年代になっているでしょう。

一方、今日の講師の方々は、五〇年前の年齢がプラス・マイナスおよそ一〇才の範囲にあつて、当時まだ少年だったか生れていな



かつたかの、比較的若い世代にあたります。さてこれからどんな話になるのか、皆様それぞれ五〇年、あるいは五〇年未満のこれまでとこれからを思いをめぐらしながら、楽しみに聞いていただければということで、ご挨拶とします。

## 高所医学からフィールド医学へ

松林公蔵

はじめに

一九九〇年五月二一日午後二時、山岳部同期の瀬戸嗣郎（現岸和田市民病院院長）と私は、熟年の医師副総隊長二名（斎藤惇生六〇歳と中島道郎五九歳、当時）と共に、中国チベット自治区にそびえるシシャパンマ峰（八〇二七m）の頂上に立った。高齢者の八〇〇メートル峰登頂記録としては、西独の六二歳の男性がマナスル（八一六三m）に登頂した記録に次ぐものであり、以後、熟年登山の先鞭となる事例であった。登攀を指揮したのは、松沢哲郎（現京大霊長類研究所長）である。

この遠征隊は、文部省科学研究費による初めてのヒマラヤ登山隊として三二名の隊員から構成されており、シシャパンマ峰に登頂するとともに高所における医学学術研究を目的とする大規模なものであった。登山・学術隊員はもとより、上記副総隊長に至るまで全員、研究者でありかつ研究登山の被験者でもあつ

た。本登山隊は、合計三二名の登頂と多くの医学的資料の収集に成功した（文献1）。

京都大学山岳部出身で当時研究者の道を歩んでいる数人の仲間と共に、「京都大学ヒマラヤ医学学術登山計画」の夢を抱懐し始めてから実に三年後のことであった。私をはじめ企画の中心となった研究者たちは、すでに学部卒業後十数年を経ており、それぞれの職場では中堅の立場にあつた。中堅の医師たちが山登りのために三カ月ものあいだ職場をあけること自体が社会常識的には異例であり、それぞれの職場の理解なくしては不可能であつたが、私たちにとっては青春時代の夢と現実的な研究が初めて合体をみた一瞬でもあつた。このような動機を、私たちはアカデミック・ロマンティズム―京大式山登りと考えている。

### 高所医学

京都大学山岳部の現役時代七年間、国内の山に登り、医学を勉強したが、「高所医学」という概念を十分には理解できなかった。国内の二五〇〇m以上の山でも、高山病はおこり得るものの、あまり現実には考えていなかった。「高所医学」を本格的に勉強したのは一九七九年に関西学院大学山岳部の隊付医師として、初めてのヒマラヤ、カラコルムに行つたのがきっかけである。しかし当時は、知識のみで、実感には乏しかった。八二年のキャンペン登山（文献2）で、近藤隊長の高山病治療を通じて、初めて高所肺水腫の病態をつぶさに体験した。キャンペンでの高

所肺水腫、脳浮腫の臨床経験から、八五年のナムナニでは、最終キャンプで高所肺水腫、脳浮腫にいたつた隊員の救命活動では、冷静な対処ができたと思う（文献3）。

高山病は、二五〇〇m以上で起こり、頭痛、食欲不振、不眠等の症状をきたすが通常は順化が可能である。高度障害には、さらにその上の四〇〇〇〜六〇〇〇mというラインがあり、ここでの馴化に失敗すると高所肺水腫、脳浮腫という致命的な状況になり得る。これは高度を下げないと確実に死亡する怖い高度障害である。これらに順化して八〇〇〇m以上になると、人間は行動できるが、だいたい判断力は低下している。八〇〇〇mの下山時に事故が多いのは判断力の低下が原因であると思われる。

高所・低酸素下における人間の病態に関する研究を高所医学という。

ヒトがエベレスト八八四八mの頂上に、酸素の補給なしで登ることが果たして可能であるのかどうかについては、戦前から数多くの議論がなされてきた。しかし一九六四年に、ピューという研究者が六〇〇〇mの人体実験を経て計算をした結果、ついにその結論を出した。結論とは、「登山者はエベレスト頂上では、酸素の補給なしでは静かに横たわることのみが可能である」（文献4）というものであった。戦前から繰り返された議論には終止符がうたれたことになる。すなわちエベレストには酸素の補給なしでは登れない、というのが米国生理学会の結論だった。

ところが衆知のように、一九七八年にライ

ンホルト・メスナーとピーター・ハーベラーの二人がエベレスト頂上に酸素なしで登ってしまう。その報告に驚嘆したのが米国生理学会である。米国生理学会は、どうして二人が無酸素でエベレストに登ることができたのかということのみを究明するために、American Medical Research Expedition to Everest (AMREE) という医学隊をエベレストに送る。登頂に成功した研究者のエベレスト頂上での呼気のガスを採取してそれをもとに再計算した結果、結論を変更する。その結論は、「エベレスト頂上において、酸素の補給なしでも通常装備を持った登山者がゆつくりとではあるが歩みを維持することは、生理学的に可能である（文献5）」と。

このエベレスト医学研究は、実際の行動者によって、学理が修正された典型的な例である。これらの研究から呼吸生理学に関するヒマラヤ医学議論に関してはほぼ続編が出た。しかしながら、高所低酸素環境下における、脳の問題、心臓に関する影響、腎臓の機能に関しては、まだ不明なことが多かった。このような高所医学的状况のなかで、一九八二年から八五年にかけて、私は幸運にも、カンペンチン、ナムナニ、マサコン（文献6）という三峰の未踏峰に立つことができた。これらの登山では、併せて高所医学の研究も行った。

マサコン峰から帰った翌年すなわち一九八六年四月から、私は高知医大老年病科への赴任を命ぜられた。高知医大老年病科は老年医学、循環器病学、神経内科学を教室の

三本の柱とする臨床科である。私は神経学の臨床と研究に携わる一方で、京大山岳部出身で現在研究者の道を歩んでいる数名の仲間と、ヒマラヤ八〇〇〇メートルにおける高所医学研究を目的とする隊をつくることを真剣に検討し始めた。一九八七年秋のことである。定期的に京都で会合を持ち、文部省科研への申請書の作成、对中国との外交折衝、高所医学研究計画の立案、当時京大病院長職にあった戸部隆吉教授に対する隊長就任要請、隊員候補の人選、予備踏査隊の派遣などで三年は瞬く間に過ぎ去った。しかし、この一見夢としか考えられぬ企画は、冒頭に述べたように一九九〇年のシシャパンマ医学学術登山隊として実現し成功した。多くの高所医学的データが明らかとなった。この過程では、従来、未踏峰主義をかかっていたA A C Kの諸先輩達が、まさに総力をあげて協力してくださった。ここに始めて、京都の先達たちが実践し、伝統としてきた学問と登山が医学という窓を通じて融合し、私たちの世代によるアカデミック・ロマンティシズムが実現したのである。

### 老年医学のみなおし

通常、医学や医療は病院を中心に行われる。高所医学は、生理学としては興味深い領域ではあるが、通常診療とはかなりのへだたりがある。医学とフィールドサイエンスの融合は現実的ではないように思えた。しかし、シシャパンマから帰って日常診療にもどり、フィールドワークの視点から、もう一度私の専門の

老年医学をみなおすと、異なった側面がみえてきた。高齢者の健康は、病院を訪れる患者という視点のみから考えては不十分ではなからうか。地域に生活する高齢者を、疾患のみならず日常生活機能と活動能力、社会・心理的背景などを含めた包括的観点から捉えなければいけないのではないかという認識である。

「臨床医学」とはその名のとおり、ベッドサイドで、病める患者の病気を診断し治療することを本来の使命としてきた。近代医学の発展とともに、病気は臓器別に専門化され、さらに臓器から細胞へ、細胞から遺伝子へとますます細分化する方向にすすんでいる。これらの先端医療は、主として病院を中心として、病院を訪れる患者のみを対象として行われ、患者の救命や治療に多大な貢献をもたらした。その結果として、日本はかつて人類史上類をみない速さで平均寿命を延ばし、今日では世界一の長寿国となった。

しかし、いちじるしい寿命の延長と超高齢化は必然的に、虚弱高齢者や要介護者をもたらす。これらのさまざま臓器に慢性疾患をかかえながら地域で生活している高齢者に対する医学的対応のありかたが老年医学に問われていた。医学が高度に専門分化した結果、医師はその専門の臓器病変のみに関心を集め、それ以外の問題を顧みる余裕がないのが実情でもあろう。その患者がどういふふうに暮らしており、どんな仲間や家族がいて、どんなものを食べ、日常生活の上でどんな課題をかかえているのか、こういった問題は大病

院中心の医療ではほとんど問題にされなかった。しかし、寿命が延びてきたことと表裏して、現在、大きくクローズアップされてきた問題は、老化と種々の慢性疾患がもたらす個人レベルの生活能力の障害である。認知症や寝たきり、脳卒中後遺症、骨・関節疾患などの慢性疾患は、年齢とともに増加し、根治させることは困難なことが少なくない。高齢者の病気が若い人の病気と異なる点は、主要な次元が生死よりもむしろ、患者自身の苦痛、能力の障害、社会的ハンディキャップというように、簡単に測定することが困難で、しかも患者自身にしかわからない問題をかかえていることである。高齢者において重要なのは、病気だけでなく、この「能力障害」を可能な限り維持・改善あるいは予防することであろう。

## フィールド医学の創出

従来の医療と高齢者医療は質的に異なる面がある。従来の医療が標準的、普遍的な性格を持つのに対して、高齢者医療はすぐれて多様性をもった個人的なものである。通常の医療が生命を至上とするのに対して、高齢者医療では日常生活機能（ADL）と生活の質（QOL）を重視する。一般医療の最終的目標が疾病の診断・治療にあるのに対し、高齢者医療の目標はADLを含めた多面的な要因を評価し、生活の自立とQOLの維持向上をめざす。一般医療には高度な専門性が要求されるのに対して、高齢者医療では学際的なチームワークが要請される。通常医療の主たる場が病院であるのに対し、高齢者医療・介護の

場は多くの場合、家庭であり地域である。その意味で、通常医療は「臨床的」であるが、高齢者医療・介護はどちらかというと「臨地性（フィールド）」が重視されねばならない。以上のような視点にたつて、私は、高知大の近隣の香北町（人口約六千人、一九九〇年当時の高齢化率三〇％）において、高齢者の健康に関するフィールドワークを開始した。

このようなフィールド活動には多くの manpower を必要とする。私は、医学部の学生でフィールド活動に興味を持つ有志を誘い、高知大フィールド医学研究会というクラブを発足させた。以後、香北町研究は老年病科とフィールド医学研究会との合同で実施してきた。毎年、定期的に実施する香北町研究によって、病院で医学的に捉える観点とは異なった地域在住高齢者の実態が徐々に明らかとなってきた。高齢者に対しては、従来の医学の武器であった「薬」と「手術」だけでなく、運動教室、リハビリ教室、デイサービス、訪問看護などの導入が重要であることもわかってきた。この老年医学的概念は、二〇〇〇年から全国に導入された介護保険制度の根幹となった。

香北町において、日本人高齢者の実態はある程度明らかになりつつあるが、それでは、自然環境や文化がまったく異なる地域に住む高齢者たちの老化のありようはどうなっているのだろうか。このような素朴な疑問から、私は、フィールド医学研究会の学生たちとともに、暑中休暇などを利用して、海外

の特殊な地域に住む高齢者の健康度調査を実施することにした。梅里雪山遭難による心理的傷跡は私自身を垂直方向の山登りからしばらく遠ざけ、フィールドの対象としての私の関心はもつぱら地球上の水平的ひろがりに向かった。一九九一年のフンザ調査（文献7）、一九九二年の南米ヴィルカバンバ調査（文献8）、一九九三年の屋久島調査（文献9）一九九四年の雲南調査（文献10）、一九九五年のチベット調査、一九九六年の秋田調査などを通じて、加齢にはエコロジーが重要な影響を及ぼすことを痛感した。

また、医学生たちにとつても、香北町研究や国内外の調査活動を通じての医学的方法論の修得と実践の中から生まれる問題意識は、大学における講義とはまた別の、みずからの将来の医師像に対する生きた指針を与えたものと思われる。事前の勉強のために書齋で文献を読むことはあつても、活動の主体はみずから現場へ訪き、自分で見て考える、という現場主義、フィールド主義は、臨床医学にとつても重要なことと私は考えている。実験室ではなく、フィールドで行った香北町研究は、二〇〇六年に町村合併により香北町がその町史を閉じるまで、一七年間継続されその役割を終えた（文献11、12）。

## フィールド医学のアジアへの展開

二〇〇〇年から私は、京都大学東南アジア研究所へ異動となり、必然的にアジアに目を向けるようになった。二一世紀において、社会の高齢化が問題となるのは先進諸国のみで

はない。二〇〇〇年ころを境に、サブサハラ以南のアフリカを除く世界中の地域で、急速な人口の高齢化が始まっている。アジアの全域でも人口の高齢化が始まり、二〇五〇年には、日本について、シンガポール、韓国、タイ、中国といった比較的裕福と考えられるアジアの国々が高齢社会 (Aged Society) となり、その他のアジアでは貧しいとされるインドネシア、ベトナム、ラオス、ミャンマーでさえも高齢化社会 (Aging Society) をむかえることが予測されている。先進諸国で発達した近代医学は、細菌学の進歩と衣食住環境の整備を通じて、まず感染症の克服に成功した。経済力にうらうちされた先進医療の進歩によって、急性期疾患の救命率は飛躍的に増大し、その結果として、先進諸国はかつて人類史上類をみない速度で平均寿命を伸ばし「長寿」を実現した。しかし、この高齢社会は必然的に要介護高齢者をもたらし、これらの慢性疾患をかかえながら地域で生活している高齢者に対する医学的対応のありかたが二一世紀医学に問われている。先進諸国は経済的に豊かな社会を実現してから高齢化が進んだのに対して、途上国では豊かになる前に高齢化をむかえざるを得ない。しかも、途上国では欧米諸国がすでに克服し去った感染症がいまだに重大な課題として残されている。

さらに、保健福祉にふりむけられる財源は豊かではない。アジアの保健福祉問題は、「感染症」、「高齢化」、「乏しい財源」という「triple burden」をかかえている。しかし、途上国のそれぞれは、高齢化というグローバリゼー

ションの趨勢を受け入れながらも、その地域固有の Local Knowledge を活かしつつ改編し、能動的に対処しようとしている。日本の各地の横断・縦断調査のみならず、アジア諸国の高齢者の実態を調査してみているのは、地域高齢者の ADL や QOL に影響をもたらすのは、近代医療の質的レベルだけではなく、自然環境と文化背景であるように印象される。そして、人の老化現象にみられる普遍性と多様性の両面から高齢者をとらえきれたとき、二一世紀の地球高齢社会に対する視野が開けてくるように思われる。

アジアのみならず、地球規模におけるフィールド医学の展開は、現在、総合地球環境学研究所の奥宮清人をリーダーとするプロジェクト「人の生老病死と高所環境―「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応―」において、世界の高地住民も射程にいれることとなった。高所生理学によってヒントを得たフィールド医学は、人の老化という普遍的かつ多様な現象を通じて概念化され、さらに実践を通じて学際的深化を受け、再度いま、高地に回帰しようとしている。

おわりに

「病氣」をあらわす英語には、語感を異にする二つの概念がある。Disease, Illness, Sickness である。

Disease (疾病) という語は、人間になんらかの症状をきたす原因が何で、どのようなメカニズムによって、その異状がもたらされたのか、どう対処すれば科学的に適切か、と

いった近代科学にもとづいた原因志向的概念ともいえる。一方、Illness (やまい) という語は、疾病の結果として患者が体験する苦痛、自覚症状、不安など、患者の主観的体験のありようを重視する概念である。患者が癒しを求めているのは、Disease ではなく、むしろ Illness である場合が多い。第三の病気の概念は、Sickness (病的状態) という語であらわされる。Sickness という語感、Illness や Disease が「正常ならざるもの」、「善からぬ状態」、「異状」として社会化された概念である。医療者はともすればこの Disease, Illness, Sickness を一元的に解釈しがちで、科学的前提で疾病の原因解明とその治療に重きをおく傾向があるが、本当に患者が求めているのは Illness の緩解であり、Sickness からの復権であろう。Disease は、人種や民族によらない概念ではあるが、Illness と Sickness は、その地域の自然生態系や文化によって異なることを私たちは銘記すべきと思われる (文献 13)。その認識はフィールド医学では強く求められる。これら、三つの疾病概念に加えて、多様な老化という現象が重層するのが加齢である。

私たちがアジアのフィールドの現場で出逢った多くの高齢者は、死そのものを恐れてはいないように印象される。高齢者がもつとも恐れるのは、空虚な余生、寝たきりの延命、そして、予測もしていなかったようなみじめな死にかたである。高齢者が、生の終わるその最後の瞬間まで、豊かな生きがいと従容とした自得をもつて生き、そして尊厳をもつて

死んでゆける、という事態は、すぐれて個人的問題ではあるのと同時に、そういった社会の枠組みを私たちの叡智がはたしてつくりだせるか否かという問題でもある。フィールド医学は、このあたりの消息をもつともよく知っているのかもしれない。

このような、私の医学や学問に関するパースペクティブと方法論は、医学そのものよりもむしろ、登山を通じてのフィールドワークを通じて学んだものであった。すべての学問の営みがそうであるように、フィールド医学の前途は決して安易ではないが、このようなアカデミック・ロマンティズムを追求し続けられればと念じている。

## 文献

- 1 松沢哲郎・松林公蔵：ヒマラヤ学誌、2:3, 1991.
- 2 京都大学学士山岳会：カンペンチン、毎日新聞社、1983.
- 3 日中友好納木那尼峰合同登山隊：ナムナニ、毎日新聞社、1986.
- 4 Pugh LGCF: J Appl Physiol 19: 341, 1964.
- 5 West JB: Science 223: 784, 1984.
- 6 堀 了平：偉大なる獅子マサコン、講談社、1986.
- 7 高知医大フィールド医学研究会：長寿伝説の里、高知新聞社、1992.
- 8 高知医大フィールド医学研究会：インカの里びと、高知新聞社、1995.
- 9 松林公蔵、他：日老医誌、31: 759, 1994.
- 10 松林公蔵、他：ヒマラヤ学誌、6: 3, 1995.

- 11 Matsubayashi, K et al.: Lancet, 347: 60, 1996.
- 12 Matsubayashi, K et al.: Lancet, 353: 1445, 1999.
- 13 松林公蔵：病気とは何か？―フィールドで考えた三つのパラダイム―。エコソフィア 14: 2-9, 2004.

(京都大学東南アジア研究所)

## 南極初越冬とその後の五〇年

横山宏太郎

### 一、はじめに

今日はチヨゴリザ初登頂五〇周年を記念するシンポジウムであるが、今年（二〇〇八年）は、大先輩西堀榮三郎氏率いる第一次南極越冬隊が帰国して五〇年目でもあるため、南極について話をする機会をいただき感謝している。今日登壇する人たちのほとんどは大学教授だが、私のように「専門員」という妙な肩書きのものが混じっているのは、私が南極越冬隊長を務めたからだろう。南極越冬隊長はこれまで四〇人足らず、かなり珍しい存在といえる。少なくとも京大教授よりは珍しい。しかも京大出身としては、意外なことに、第一次の西堀越冬隊長以来、第三五次の私が二人目だった。

私が小学生の頃に南極観測が始まった。子供向けの雑誌に載った記事に漠然とではある

が興味を持った。特に雪上車の図解が記憶に残っている。その後登山の楽しみも覚え、南極やヒマラヤへの近道と信じて京大山岳部を目指した。先輩方のまねをしたりお世話になったりしながら、幸いに南極にもヒマラヤにも行くことができ、たいへんありがたく思っている。

南極観測が始まったころは、「宗谷」の苦闘、生きていたタロ・ジロなど南極は国民の大きな関心をあつめていたが、下って関心が薄れた一時期もあつた。最近では、地球環境変化への関心のたかまりもあつて、話題に上ることも増えてきたのはありがたい。

### 二、南極と南極観測

南極と南極観測について簡単に紹介してきた。南極は日本の約二・六倍の面積をもち、ほとんど氷に覆われている大陸で、氷の厚さは平均約二五〇〇mである。氷は巨大な鏡餅状で、中心から周囲に向かってゆつくりと流動している。表面は内陸ほど高く、四〇〇〇m以上にもなる。この氷の量は、地球上の淡水の六割強を占め、もし全てが融ければ海面は約六〇mも上昇するほどである。

南極観測を実施している国は二八カ国で基地は四〇以上ある。昭和基地を中心とする日本隊の観測項目は、超高層から地表面下、また海中まで多岐にわたる。多くは地球環境に関連した観測といつてよい。その大きな成果を二つ紹介したい。一つは、オゾンホールが発見である。例えば一九八〇年と一九九四年の南半球のオゾン全量のデータを見ると、



夏の昭和基地主要部、1994年

一九九四年には南極上空では一九八〇年の半分ほどに減っており、低濃度の領域が広がっているのがわかる。一九八二年のこと、昭和基地で継続しているオゾン観測で、極端に低い数値が現れた。測定器の異常を疑ったが、どう調べても正常だ。帰国してデータを整理しても、やはりその低さは本物と考えられたため、論文で発表した。その後情報が集まると、南極上空の異常な低オゾン量が明らかになった。これが、「オゾンホール」の発見であった。「オゾンホール」を知る人は多いが、それが日本の南極観測の成果であることは意



南やまとヌナターク群初調査、1973年、雪上車はKC20型

外に知られていない。もつと南極側からの情報発信が必要と思う。

もう一つは、氷の掘削による地球環境変化の解明である。南極氷床は雪が圧密によつて氷となることにより形成される。雪に含まれていた空気の一部は、氷になると気泡の形で残る。南極の氷は、昔の雪と空気が順に積み重なったものである。これを掘削して取り出せば、地球環境の歴史がわかる。たとえば、空気（気泡）の組成からは過去の二酸化炭素濃度が、また氷中の酸素同位体比からは気温変化がわかる。日本では十数年前からこのよう

な氷床深層掘削計画を開始した。掘削地点は昭和基地から内陸へ一〇〇〇kmのドームふじで、標高三八一〇m、鏡餅状をしている氷床の頂部の一つである。氷床頂部では水平方向の氷の流動がないので、氷はそこで積もった雪であり、解析結果の解釈がしやすい。ここで一九九六年に二五〇三m深の掘削に成功し、約三二万年分の気候変化の様子が明らかにされた。ついで第二期掘削では三〇〇〇m以上と見られる氷床底までの掘削を目指したが、二〇〇七年一月、三〇三・二二mまで達したところで終了した。約七二万年分の氷サンプルが得られ、目下解析中である。

### 三、南極五〇年の変化

第一次日本南極地域観測隊が出発したのは一九五六年一月八日である。目的地は南極大陸の東経三五度付近、プリンスハラルド海岸だが、現地の情報は一九三七年にノルウェー隊が飛行機から撮影した写真のみ、「南極探検隊」といつてよい状況であった。首相官邸で催された壮行会での記念写真、大勢の見送りを受けての宗谷出港の様子をみると、まさに「壮途」である。暴風圏と氷海を乗り切つて宗谷はリュツォ・ホルム湾の定着氷に接岸し、隊員のたいへんな苦勞の末に一九五七年一月二九日、昭和基地上陸、建物四棟が建設され（実際には前記上陸地点とは別の場所に建設）、第一次越冬が始まった。第一次での越冬の必要性を主張し、実現にこぎ着けたのは西堀氏であった。これがなければ、第二次隊の苦勞など考えあわせると、



やまと山脈到着間近の旅行隊、1973年、雪上車はKD60型

日本の南極観測は少なくとも数年程度遅れることになったのではないか。西堀越冬隊長以下一一名は無事初越冬を終え、第二次隊との交代を待った。しかし第二次隊を乗せた宗谷は厚い氷に阻まれ昭和基地になかなか接近できず、ついに第一次越冬隊員を収容しただけで帰途につき、結果的にカラフト犬は残されてしまった。そして翌年、第三次隊がタロ・ジロと再会する。

宗谷の老朽化を第一因として南極観測は第六次隊（夏隊のみ）をもって中断する。多くの人たちの努力により、新観測船「ふじ」が建造され、第七次隊からの再開に至る。



ドームふじ到着、左から3人目は筆者、右端は前次隊が残した人形、1994年、雪上車はSM100型

る。第二五次からは「しらせ」が就航し、二〇〇八年四月の帰港をもって退役となった。二〇〇八年出発の第五〇次隊はオーストラリアの船をチャーターして南極に向かうが、二〇〇九年からは建造中の新観測船が「しらせ」の名を引き継いでその任にあたる。

一九五六年の第一次隊から、中断を挟むため五二年目に出発する第五〇次隊までのうち、私は第一四次（出発一九七二年）と第三五次（同一九九三年）に参加したので、その歴史の前半・後半を見たことになるだろう。この間の変化は極めて大きく、基地は拡大し、越冬人数は増え、観測も発展充実した。

生活面の利便性、快適性の向上も大きい。日本の場合、昭和基地付近には大型航空機に対応する滑走路が造れないため、輸送は年一回の船による輸送に頼っており、途中の補給は全くない。したがって、上記の変化は輸送力、すなわち観測船の変遷によるといえる。観測隊の物資は、宗谷時代が数十トン、ふじで五〇〇トン、しらせで一〇〇〇トンである。

その半分程度が燃料であるから、変化は消費できるエネルギー量にもなっており、起ったと言え換えることもできる。

南極第一の特徴は、その大部分を巨大な氷床が覆っていることであり、そのため南極観測開始当時、その内陸には踏査が及ばず全く未知の領域であった。内陸調査は南極観測の中でもっとも探検的な行動であり、山岳関係者がその中心的役割を担ってきた。とはいっても登山とは違い雪上車が足となる。内陸調査の発展は、雪上車の発達にともなう行動力、輸送力の向上とともに実現された。主な雪上車として、初期のKC20型などの小型雪上車、極点旅行（九次）に向けて開発された大型のKD60型、その後広く使われた中型のSM50型、ドームふじ深層掘削計画を控えて開発された最大のSM100型がある。SM100型は、二トンそり七台を牽引でき、ドームふじへの物資輸送に大活躍した。南極の地図を広げると、沿岸から内陸に向かって先人たちの苦闘のあとが示されている。近年は調査範囲が大きく拡大し、第四八次では二八〇〇kmに及ぶ日本—スウェーデン合同調査旅行を成功させ、未踏査地域から多くの情報を持ち帰った。

内陸にはまだ興味深い調査対象・領域が残っている。

#### 四、南極観測隊の一七ヶ月

観測隊は一月に日本を出発、一二月後半には南極に着き、夏隊は観測船が南極を離れる翌年二月初めまで活動する。往復の船上でも観測が行われる。越冬隊は二月からさらに次の一月まで一年間越冬し、次の隊と交代して、出発から足かけ三年、一七ヶ月目の三月末に帰国する。観測隊員は、かつては日本(東京)から乗船したが、最近はおーストラリアで乗船する。帰路はおーストラリアで下船する。近年の標準的な観測隊の規模は、越冬隊約四〇人、夏隊約二〇人だが、時々計画により増減する。航空機で現地入りして活動する数人の別働隊が編成されるときもある。

観測船はおーストラリアに寄港して物資を補給、暴風圏を乗り切れば氷山が迎える南極海である。昭和基地付近は冬に形成される海水が夏まで残りやすく、厚い多年氷となつて行く手を阻む。ふじ時代は昭和基地に接岸できないこともしばしばで、物資輸送はヘリコプターが主力であつた。かわつて最大砕氷能力三mとなつたしらせではもはや問題なしと思われたが、私の参加した第三五次では昭和基地接岸断念(しらせではこれ一回だけ)という事態が起こつた。南極の自然の変動は大きく、油断は禁物である。通常は、一二月下旬に昭和基地に接岸する。南極での作業はまず基地への物資輸送、次に建設作業である。一握りの専門家と大勢の素人たちが作つてき

た基地だが、現在ではすいぶん快適になつた。それには、発電機などの諸設備と燃料、隊員の普段の努力が必要である。

二月に船が去つて越冬が始まると季節は秋から冬とうつり、暗い時間が長くなる。昭和基地では太陽の出ない極夜が約一ヶ月半続く。この時期の楽しみはオーロラである。また冬至には南極全土がミッドウインター祭で盛り上がる。太陽が戻つてくると、ペンギンなど生物も、観測隊も活動が活発になる。私は、第一四次ではやまと山脈調査旅行など、全期間の半分以上を内陸で過ごした。南やまとヌナターク群(氷床から頭を出している山塊)の初調査では、ささやかながら地理学上の発見の感激を味わうことができた。第三五次では、一〇月から一月にかけて、片道一〇〇kmのドームふじ旅行に参加した。春とはいえ、内陸へ進むほど標高が高くなることもあつて気温は下がり、ドームふじ(標高三八一〇m)の近くでマイナス六七・五℃を体験した。越冬後半にはみな寒さに強くなつており、そんな中でも活動を続ける。第三五次でドームふじの基地建設を終え、第三六次からの越冬・深層掘削開始となつた。南極越冬の一年は、長いようでも終わつてみればあつという間、というのが大方の感想である。二月、昭和基地を第三六次隊に引き継いで「しらせ」に移り、さらに三月、無事帰国した。

#### 五、京大山岳部と南極

南極五〇年で、観測隊に参加した人は二〇〇〇人を越える。南極の厳しい環境での

活動は雪山登山に通じるところがあり、初期には特に大学山岳部出身など山岳関係者の参加が多かつた。京大山岳部(出身者)はどのように関わつてきたのだろうか。私の数えたところでは、南極観測隊経験者は実数一九名のべ二八名である。ほかに、探検部出身者が三名参加している。あわせても数としては全体の約一%にすぎない。

南極観測立ち上げの頃、今西錦司氏が西堀氏に向かつて、「うん、南極は海軍やな、俺は陸軍やで」といったさうである(西堀榮三郎選集二巻)。この影響もあつてか、初期の南極の設営は東大スキー山岳部出身者を中心に進められることになつた。しかし、数は少ないとはいえ西堀第一次越冬隊長をはじめとして、一次・三次の北村泰一氏、再開時(七次)の前小屋端氏・西山孝氏、初めての広域内陸調査(一〇次)とドームふじ初探査(二六次)の上田豊氏など、それぞれに重要な場面で活躍しておられるように思う。

もちろん京大山岳部は南極に無関心だつたわけではない。南極最高峰、ビンソン・マシフ初登頂をねらつた計画も立てられた。私のように、なにも知らないながらも南極やヒマラヤに行つてみたいと入部したものを受け皿として、「極地研究会」、「ヒマラヤ研究会」が活発に活動していた。「極地研究会」は北白川の西山孝氏の家で開かれていた。そこには、西山氏に加え、前小屋氏、北村氏といった南極経験者が現れ、後輩たちに、夢が現実になるかもしれないと感じさせていた。当時の研究会メンバーから南極へ行つた人は実に



多い。しかしその後の世代からはわずか二人だけという点は残念である。南極への興味は薄れてしまったのだろうか。

## 六、おわりに

南極とヒマラヤ、ともに探検的興味の対象であるが、違いの一つは、南極（観測隊）では越冬となれば一年以上の長期の活動であり、行動範囲も広いために、生活も含めて設備（ロジステイクス）が大規模になり、それだけ重要性が高いという点ではないか。雪上車の修理や調理の手伝いのように、ほかではできないいろいろな体験から学べることも含めて、設備も南極のおもしろさの一部と思う。

五〇年を経て、たしかに初期の探検的な興味は薄れてきた。しかし地球環境問題に代表されるように、科学的な重要性はますます高まっている。設備・機材は高度になり、観測内容は充実してきた。ところが自然の厳しさは変わらないのに、隊員の意識・資質は変化している。安全に観測を継続して行くにはこれまで以上に努力が必要である。フィールドで安全に活動できるだけの経験・知識・技術はいつそう重要、貴重になっている。南極のフィールドワークの面白さは残っており、そこでのロジステイクスの重要性も変わらない。山岳部出身者の活躍の場は用意されている。

いま、南極観測は変わろうとしている。社会の変化に対応して、行動形態や組織・運営方式の見直しが必要であり、また新しい観測船の就航によってそれが可能となりつつある。

南極のような、厳しい自然環境での活動の原点は、「おもしろそうや、行ってみたい」だと思う。南極観測は、もつと「おもしろそうや」と思う人が行き、「おもしろいこと」ができるように変わって欲しい。「おもしろいフィールド」としての南極が復活し、多くの人たちが目を輝かせて南極に向かうことを願っている。

（中央農業総合研究センター専門員）

## 雪氷生物学から野生動物研究へ

### —雪虫からイルカまで—

幸島司郎

私はこれまで主に、雪や氷の世界に生息する生物、特に氷河に生息する生物の研究を行って来た。しかしそれと同時に、マメジカやオランウータン、インコ、ヒト、オオカミ、サイ、イルカ、シャチ、ウニなどの動物やクスノキ、アカメガシワ、キリ、ヤブカラシ、ツタなどの植物、果ては単細胞藻類やバクテリアなどの微生物に至る、実に様々な生物の研究を学生と一緒にやって来た。こんなハチャメチャな研究者は少ないと思う。なぜこうなったのか？何が面白いのか？を、私の研究歴をたどりながらお話しする。

### 雪虫の研究から

大学生のころ、冬山の雪の上をこそぞ歩き回っている雪虫（セッケイカワゲラ）に出

会い、「寒いのになぜ動けるのか？何を食べてるのか？何をしているのか？」不思議でたまらず研究を開始した。研究の結果、彼らは「寒くても動ける」のではなく、「寒くないと動けない」こと、数ヶ月間も雪の上を歩いて川の上流方向へ移動するなど、積雪という環境をうまく利用した見事な生活史を送っていることがわかった。

### 氷河昆虫の発見

こうして雪虫を研究するうちに「氷河にも虫がいるかも知れない」という妄想に取りつかれるようになり、一九八二年に初めてヒマラヤの氷河を調査した。そして運良く、氷河の雪と氷の中だけに住む昆虫を世界で初めて発見することになった。冷たい雪と氷の世界である氷河は、長い間ほとんど無生物的な世界と見なされてきたが、実は様々な生物が生息していたのである。例えば我々が調査した氷河には、雪や氷の中で増殖する藻類やバクテリアなどの微生物をはじめ、それらを食物として生活している昆虫類やミジンコなどの甲殻類が高密度で生息していることが明らかになった。これらは、いずれも氷河という環境に特殊化した生物である。例えば、私が発見したヒョウガユスリカ (*Diamesa koshimui*) は、体長3mmほどの小さな昆虫で、翅が退化しているために飛ぶことは出来ず、氷河の表面を歩いたり、雪や氷の隙間に潜り込んだりして生活している。低温に強く、氷点下の気温で活発に活動するが、手の平に乗せて暖めてやると痙攣して動けなくなっ

しまふ変わった虫である。幼虫は氷の隙間で藻類やバクテリアなどの微生物を食べて成長する。面白いことに、この虫のメスたちは、少なくとも一か月以上、氷河の上を上流に向かって歩きつづけ、生まれた場所からかなり上流に移動してから産卵することがわかった。これは氷河に定住するためにどうしても必要な行動らしい。氷河は常に流動しているので、彼らは親になるまでに必然的に下流方向に運ばれる。だから、もし親になった地点ですぐに産卵すれば、何世代か後には氷河の外に流出してしまうだろう。そこで、氷河の上に留まるために、上流に移動してから産卵すると考えられるのだ。このように、氷河には氷河という環境に対して様々な適応をとげた生物を含む独自の生態系が成立していたのである。

### 氷河生物のアルベド低下作用

その後も、世界各地の氷河を調査して、水生生態系の研究を続けるうちに、氷河生態系の生物が氷河の融解にも大きな影響を及ぼしていることがわかってきた。例えばヒマラヤでは、モンスーン期（夏）になると氷河上で増殖する藍藻類とバクテリア（氷河昆虫の食物）が形成する黒い泥状物質が氷河表面をおおうため、氷河の下流部が黒く色付けられる。調査の結果、この泥状物質によって氷河の表面融解速度が約三倍にも加速されていることが明らかになった。雪や氷は地球上で最も白い、つまりアルベド（反射率）の高い物質で、太陽からの入射エネルギーのほとんどを

跳ね返してしまふ。ところが、表面が黒い汚れに被われると、アルベドが下がり入射エネルギーの吸収効率が上がるため、融解が加速される。つまり、この氷河では生物活動が氷河の融解を加速し、氷河を縮小させていることになる。このような作用は、その氷河の生物相によってその程度が大きく異なる。我々は現在、グリーンランドなどで氷河の生物活動とアルベド低下の関係について研究を進めている。

### 古環境示標としての氷河生物

氷河の深い部分の氷には過去の氷河微生物が氷詰り化石となつて保存されている。春から夏にかけて氷河の表面で増殖した微生物が、秋の降雪によって埋められ、毎年氷河内部に取り込まれるからである。ヒマラヤや北極、パタゴニアの氷河にドリルで深い穴をあけて採取したアイスコア（柱状氷試料）には、このような過去の氷河微生物を含んだ氷層が何百年分も含まれていた。調査の結果、アイスコアに含まれる微生物の量や種類組成は、過去の環境条件（例えば夏の気温や積雪量、光条件など）を反映しており、古環境復元の新しい情報源となることが明らかになってきた。

### イルカの睡眠

東京工業大学に一般教育生物学担当教員として勤務するようになって、「どうしても生物の研究がしたい！」という、変わった（貴重な？）学生が集まってくるようになり、お

かげで研究対象が徐々に広がっていった。たとえば、東工大生なのに「どうしてもイルカの研究がしたい！」という学生たちと、イルカの行動の研究を始めることになった。

完全な水中生活を送っているイルカ・クジラ類は睡眠も水中で行うため、睡眠中といえども水面に浮上して呼吸せねばならない。したがって、その睡眠は陸上動物とは大きく異なる予想されているが、その実体はまだよくわかっていなかった。水族館のハンドウイールカの活動度が最も低下する時間帯の行動を分析した結果、彼らの行動は、プールの底で不動の姿勢を保つ「着底休息」、水面上に浮上して長時間停止する「浮上休息」、プールの深い部分をゆっくり大回りで泳ぎ続ける「遊泳休息」の三種類に分類できることがわかった。これらの行動中には少なくとも一方の目が閉じられているため、眠っている可能性が高い。また、遊泳休息時には、およそ一〇分ごとに閉じる眼を交代することから、遊泳休息中には、左右の脳半球を交互に休ませる半球睡眠が行われていることが示唆された。

ところが二〇〇五年に、出産直後のハンドウイルカは、出産から約一ヶ月間全く停止せずに泳ぎ続け、目もほとんど閉じていなかったことから、この期間ほとんど眠っていないのではないかとする驚くべき報告がネイチャー誌に掲載された。しかし、我々のこれまでの観察では、出産直後にも遊泳休息は行っており、この期間にも眠っていると考えられた。そこで彼らの報告を詳しく検討したところ、彼らは目の開閉状態を浮上の瞬間に

しか確認していないことがわかった。そこで、水中と水上で目の開閉状態の同時観察を行った結果、出産直後の母子も頻繁に遊泳休息を行っており、水中では目を閉じていることが明らかに多かった。彼らは平均約三〇秒ごとに水面に浮上して呼吸するので、半球睡眠を行っている間も、そのくらいの時間間隔で瞬間的に覚醒度をあげている（部分的に目覚めている）ことになる。この問題に関しては、ネイチャー誌上で論争となったが、この論争によつてイルカ・クジラ類の睡眠が、これまで考えられてきた以上に陸上哺乳類の睡眠と大きく異なっていることがますます鮮明になった。

### 野生ミナミハンドウイルカの行動

伊豆諸島の御蔵島近海に生息する野生ミナミハンドウイルカを対象に、胸びれで相手の体をこすり合う「ラビング行動」など、イルカ類の社会行動の研究も行ってきた。この海域はイルカの密度が高く海水の透明度も高いため、水中でイルカ類の行動を直接観察することができ、世界でも稀な場所となっている。この海域で水中ビデオ撮影を行い、撮影されたラビング行動を詳しく分析した結果、この行動は、こすられる個体が古い皮膚の除去など、何らかの利益を受けている親和的社会行動であると推定された。この行動を分析すれば、彼らの社会構造をより詳しく理解できると考えられる。

ヒトの目サルの目・白目があるのはヒトだけか？

ヒトやサルの目の外部形態の研究も行った。ヒトを含む霊長類の形態は非常に多様であり、目の形や色彩も例外ではない。しかし、それらの形態がどのような機能や適応のために進化したものなのかを説明する仮説や研究は、どこにも見当たらなかった。我々はデズモンド・モリスが「ボディーウォッチング」(Morris 1985)の中で「白目がある霊長類はヒトだけなのではないか」と述べていたことに興味を持ち、ヒトの目の形態は他の霊長類とどこがどう異なっているのか、なぜ異なっているのかを理解するために、できる限り多くの霊長類の目の形態を分析・比較することにした。

分析の結果、ヒトの目の外部形態は以下の三点で他の霊長類とは大きく異なることが明らかになった。(一) 調査した他の全ての霊長類では、ヒトの白目に相当する露出強膜が色素細胞によつて暗色に着色されていたのに対して、ヒトでは露出強膜に色素細胞による着色が全く見られないこと。つまり白目があること。(二) 露出強膜が目の輪郭に占める割合(白目度)と(三)目の輪郭の縦横比(横長度)がそれぞれ霊長類中最も大きいこと。つまりヒトでは、目の輪郭に占める白目の割合が大きい、逆に言えば黒目(虹彩)の比率が小さいこと。また、目の輪郭が霊長類としては異例に横長だということである。では、なぜヒトの目では、このような霊長類としては特異な形態が進化したのだろうか。

分析の結果、白目度や横長度は眼球を動かすことによつて視野を変更・拡大する能力に関係していることが示唆された。白目度が高いということは黒目(虹彩)が相対的に小さく、眼球を動かして黒目を移動させる余地が大きい、つまり眼だけ動かして視野を変更する能力が高いと考えられる。樹上性の種が横長度の低い丸い目をしており、地上性の種ほど横長な目をしているのは、樹上生活では上下左右等に視野変更する必要があるのに対して、地上生活では上下より左右、つまり水平方向に視野変更することが多いことへの適応だと考えられた。つまり、ヒトが白目度が高く横長な目を持つのは、体サイズが大きいために地上性の霊長類だからということになる。しかし、これだけではヒトの飛び抜けて大きな白目度と横長度は十分説明できない。ヒトの白目度と横長度は、体サイズがヒトよりも大きく同じように地上性であるゴリラなどより高いからだ。

調査した霊長類の虹彩と強膜、目の周辺の皮膚の色の濃さの関係を分類した結果、ヒトをのぞく全ての種が、視線が判別しにくい視線隠蔽型の色彩パターンであったのに対して、ヒトのみが顔の中の目の位置と目の中の虹彩の位置がどちらも判別しやすい視線強調型の色彩パターンであることがわかった。これらの事実は、霊長類の中で飛び抜けて高いヒトの白目度と横長度が、体サイズが大きく地上性であることへの適応だけでなく、眼球運動、特に横方向の目の動きによる視線コミュニケーションへの適応である可能性を示

唆している。

## オランウータンの顔形態と行動

オランウータンの目がヒトの目によく似ていることに気がついたことから、オランウータンの研究も始めた。おそらくヒトのように視線によるコミュニケーションが発達しているのだろうと考え、その手がかりを得るために、まず彼らの顔の形態、特にその性や成長段階による変化を分析することにした。その結果、彼らの顔形態は、成長による目や口周辺の皮膚の色、頭部の毛の状態、額や頬の張り出し、頬髭や口ひげの変化によって、(一)乳児期の顔(約三歳まで)、(二)コドモ期の顔(約三〜七歳)、(三)ワカモノ期の顔(約八〜一〇歳)、(四)ワカメス(若いオトナメス)期の顔(約一一〜二〇歳)、(五)オトナメス期の顔(二〇歳以上)、(六)優位オトナオスの顔(約一〇歳以上)、(七)劣位オトナオスの顔(約一〇歳以上)に分類できることが明らかになった。

乳児期の目と口の周辺にある白っぽい皮膚や、乳児期からコドモ期の頭部のまばらで直立した細い毛は、コドモであることを示す視覚シグナルである可能性が高い。逆に、暗色の顔色や口髭、頬髭はオトナであることを示す視覚シグナルであると考えられる。また、メスでは目の周辺の皮膚の暗色化がオスよりゆっくり進行し、目蓋だけが白っぽい状態が一〇歳から二〇歳くらいまで持続すること、オトナ期の口髭や頬髭はオスの方が濃いことなど、これまで知られてこなかった性差も明

らかになった。白い目蓋や未発達な口髭や頬髭は若いオトナメスであることを示す視覚シグナルなのかもしれない。これらの結果は、オランウータンの顔形態が彼らの視覚コミュニケーションに重要な役割を持つことを示唆している。この研究がきっかけとなって、ポルネオ島のダナムバレーの熱帯雨林での野生オランウータン研究が五年前から始まり、現在も継続されている。

## パイオニアワークとしての研究

本稿ではとても詳しく紹介しきれないが、この他にも熱帯雨林のママジカの生態、クロサイやシロサイの嗅覚行動、東京に住み着いたインコの生態と行動、オオカミのコミュニケーション、ウニの行動学、ネオンテトラの色彩の適応的意味(なぜあれほど派手なのか?)、ガンジスカワイルカの行動、植物の

## 図書紹介

### 『ブッシュマン、永遠に。』

田中二郎著(昭和堂)、定価(二四一五円)

松浦祥次郎

人類学に少しは興味を持っているにしても、その分野に何の教養も素養もない筆者が本書の紹介をするなど考え違いもはなはだしいことながら、著者から恵贈いただき、読書の楽しみを満喫したのみでなく、現代文明の

捕食回避戦略(植物行動学)などなど、変な学生達との付き合いから、実に様々な研究をしてきた。というより、やり散らかして来た感が有る。これらの研究には一見何の関連性も無いように思える。しかし、よく考えてみると「誰もやってない研究」つまりパイオニアワークである点は共通していることに最近気がついた。つまり、意識していたわけではないが、私は「パイオニアワーク、オールラウンド、コンプリート」という京大山岳部のスローガンを研究にも適用して来たようだ。どうせ研究するなら誰もやってない研究をしよう。未知の領域に踏み込むためにはいろいろな技術や経験が必要である。やるなら徹底的にやろう。というわけである。今後も、多くの若者にパイオニアワークとしての研究の面白さを伝えて行きたい。

(京都大学野生動物研究センター)

独善的ともいえる世界化に深い反省を覚えざるを得なかったので、臆面もなく一文を呈させていたくことにした。

著者は一九六六年以来四〇年にわたりフィールドワークを基盤としたブッシュマン研究をライフワークとした。その成果のエッセンスを一般市民にも分かるように示してくれている。全編を通じて、対象への観察は科学者らしい明晰さを保ちつつ、筆致からは著者の人間性と息づかいをひたひたと感じさせられる。

本書の構成は、第一章コイサン人―ブツ

シユマンとコイコイーの起源と歴史、第二章狩猟採集の生活、文化と社会、第三章ブッシュマン社会の変貌、第四章定住地の整備、第五章長期共同調査の体制を整える、第六章定住化と開発、第七章故郷を追われる人びと、となっている。そしてこの構成自体に著者が現代世界に提示したいと考えているアジェンダが読み取れるように筆者には思われる。

筆者がブッシュマンとの言葉から直ちにイメージを浮かべるのは、空から砂漠へ突然降ってくる一本のコカコーラの空瓶が始まる同名の映画である。その主人公の余りの純真さに、「こんな良い人間が本当にいるのか」と思ったが、著者が記述している主人公役のブッシュマン―ガウハナさん―の人物は「過剰の所有を誇らず、所有することに心を左右されない」という、まさにブッシュマンのありようの典型を示しているようだ。

人間が人間らしくなったのは言葉を発する能力を得たことからだと言われている。その能力から知識と知恵の蓄積と発達のポジティブ・フィードバックを生じ、同時に欲望を実現する力を生じた。それが現代では欲望肥大の制御不能に陥りかけている。

一方、ブッシュマンはどうしたわけか不要に欲望の拡大をさせないという文化の遺伝子を身に着け、そのうえで社会が存続できることを何万年にもわたり示してきたのだ。何がそうさせたのかを見出すことは、現代文明社会の先行きをどうするかに大きい影響を及ぼす可能性がある。しかし、現代文明社会がブッシュマンの人たちに強制していることは

その可能性を壊しつつあることだ。これは全人類にとって根本的な損失かも知れない。ブッシュマンが伝えてきた人類にとって大切なことを、どのようにして保存し承継するかが重要なアジェンダであることを本書は提示している。筆者は、それが本書の標題になっているとも思う。

## AACK海外登山・探検助成制度の案内

AACK事務局 吹田啓一郎

会員の海外登山や探検的な活動を支援する海外登山・探検助成制度の案内です。応募される方は左記の要領でお申し込み下さい。毎年、三月に採択の審査を行います。来年度の計画で応募される方は二〇〇九年二月末までに奮ってご応募ください。

### 一、申請方法

下記の事項（申請時の予定でよい）を記した会長（上田豊）宛の申請書（A4紙に五枚以内）を作成してください。送り先はAACK事務局長宛に郵送、あるいはPDFを電子メールでお送りください。送り先：  
〒612-8325 京都市伏見区清水町867-3  
吹田啓一郎、または [suita@archi.kyoto-u.ac.jp](mailto:suita@archi.kyoto-u.ac.jp)

- (一) 隊または計画の名称
- (二) 申請会員名と連絡先、Eメール等

- (三) 隊の構成（氏名、年齢、所属山岳会）… AACK会員外の参加も認めます
- (四) 対象国・山域・地域
- (五) 概略のルートと日程
- (六) 予算
- (七) 隊の特徴などのアピール（計画の目的、意義と対象地域・活動内容、準備状況、隊員構成の関係など）
- (八) 助成金の振込先（銀行名、名義、口座番号等）

### 二、海外登山・探検助成制度 運用規定

第一条 海外登山・探検助成制度（以下、助成と称す）は、バイオニア的なしオリジナリティのある海外登山や探検的活動の助成を目的とする。

第二条 助成の対象は本会会員が主催する計画とし、申請者は本会会員に限る。助成に際しては審査委員会の審議に基づき、理事会が決定する。

第三条 審査委員は理事会で選出する。委員の任期は二年とし、再任を妨げない。

第四条 助成金額は一件一〇万円を原則とし、年間三〇万円を上限とする。ただし理事会が認めた場合はこの限りでない。

第五条 本規定は二〇〇五年五月一五日の総会の承認を得て施行する。

申し合わせ事項

- 一 助成の決定は原則として年一回三月に行い、予算に余裕があれば九月にも行う。
- 二 助成を申請しようとする者は会長宛に文書により申請し、事後三ヶ月以内に報告書を

提出しなければならぬ。報告書はAACKニューズレターならびにホームページに掲載する。

三 一計画につき一申請だけ受け付ける。

## 日本山岳協会・山岳共済の案内

AACK会員の皆さまへ、日本山岳協会が実施する山岳遭難共済制度への平成二一年度の加入方法などについてのご案内です。前年度と比較して保険料と保険金額に若干の変更があります。保険の制度や区分の変更はありません。山岳登攀コースでは、山行中の疾病（高山病を含む）が原因の遭難捜索費用も原則支払われることになっていきます。加入を希望される方は下記の要領で手続きを行ってください。山岳共済の条件として加入者は山行時に所属山岳会（AACK）へ登山計画書を提出することが義務づけられていますのでご承知おきください。

日帰りハイキングなどの軽登山をされる方には、軽登山コースが用意されています。このコースは山行計画書の提出は義務づけられませんし、保険料も安く設定されています。ハイキングといえども高齢の方にはどのような事故に遭遇するとも限りませんので、そのような方には万一に備えてこのコースがおすすめです。詳しくは後の説明をご覧ください。なお、制度の運用に必要な業務は堀内潭様、阪本公一様に委託し、ご協力をいただいています。

AACK事務局 吹田啓一郎

表1（山岳登攀コース）（\*は前年度から変更された箇所）

| タイプ名       | 保険金額    |         |        |        |
|------------|---------|---------|--------|--------|
|            | 1 S     | S       | 1 B    | B      |
| 死亡・後遺障害    | 100万円   | 100万円   | *159万円 | *159万円 |
| 遭難捜索       | 100万円   | 100万円   | 150万円  | 150万円  |
| 入院（1日）     | 1,000円  | 0       | 1,000円 | 0      |
| *手術保険金（入院） | 注*1     |         | 注*1    |        |
| 通院（1日）     | 600円    | 0       | 600円   | 0      |
| 個人賠償責任     | 1億円     | 1億円     | 1億円    | 1億円    |
| 保険料        | *5,850円 | *3,560円 | 7,490円 | 5,200円 |
| 共済会年会費     | 1,000円  | 1,000円  | 1,000円 | 1,000円 |
| 合計金額       | *6,850円 | *4,560円 | 8,490円 | 6,200円 |

| タイプ名       | 保険金額    |        |         |         |
|------------|---------|--------|---------|---------|
|            | 1 C     | C      | 1 E     | E       |
| 死亡・後遺障害    | *235万円  | *235万円 | 500万円   | 500万円   |
| 遭難捜索       | 200万円   | 200万円  | 500万円   | 500万円   |
| 入院（1日）     | 1,500円  | 0      | 2,500円  | 0       |
| *手術保険金（入院） | 注*1     |        | 注*1     |         |
| 通院（1日）     | 900円    | 0      | 1,500円  | 0       |
| 個人賠償責任     | 1億円     | 1億円    | 1億円     | 1億円     |
| 保険料        | 10,440円 | 7,000円 | 21,680円 | 15,950円 |
| 共済会年会費     | 1,000円  | 1,000円 | 1,000円  | 1,000円  |
| 合計金額       | 11,440円 | 8,000円 | 22,680円 | 16,950円 |

\*注1：手術の種類に応じ、入院保険金額の10倍、20倍、40倍の額をお支払いします

表2（軽登山コース）（\*は前年度から変更された箇所）

| タイプ名       | 保険金額   |        |
|------------|--------|--------|
|            | I      | II     |
| 死亡・後遺障害    | *176万円 | *276万円 |
| 救済者費用      | 300万円  | 300万円  |
| 入院（1日）     | 2,000円 | 4,000円 |
| *手術保険金（入院） | 注*1    |        |
| 通院（1日）     | 0      | 1,700円 |
| 個人賠償責任     | 1億円    | 1億円    |
| 保険料        | 2,000円 | 5,000円 |
| 共済会年会費     | 1,000円 | 1,000円 |
| 合計金額       | 3,000円 | 6,000円 |

\*注1：手術の種類に応じ、入院保険金額の10倍、20倍、40倍の額をお支払いします

### 一、山岳共済の種類

国内山行を対象に山岳登攀コースと軽登山コースの二つのコースが用意されています。

山岳登攀コースは八種類、軽登山コースは二種類のタイプが用意されており、それとは

別に海外山岳共済の追加オプションがあります。

（二）山岳登攀コースは表1の八種類です。（\*は前年度から変更された箇所）

(二) 軽登山コースは表2の二種類です。初心者でも可能な一般登山道での普通の登山(夏山登山で雪渓を越えるために軽アイゼンを使用した場合も対応する)が対象です。そのため山行計画書の提出は義務づけられません。只、軽登山コースの場合は、山岳登攀コースと異なり、疾病が原因となる搜索費用は補償の対象となりません。

### (三) 海外山岳共済

基本契約タイプの一種類だけです。保険金額は次のとおりです。昨年と同様に、遭難搜索費用には緊急救助ヘリコプター費用も保証されることを確認しています。

死亡・後遺障害 百万円

救援者費用 五百万円

個人賠償責任 一億円

保険料は、対象の山岳、日数により個別に見積もられることになっていきますので、海外登山又はトレッキングに行かれる方は、事前にも堀内様を通じ山行計画を提出して、保険料の見積もりを取得して下さい。尚、加入するためには、共済会に入会していることが必要です。参考までに、過去の保険料の事例を示します。

(A) 二〇〇七年の阪本公一さん達のインド・ヒマラヤのトレッキング(期間:三六日間)

一人当たり保険料 一四八〇円

(B) 二〇〇七年の安仁屋政武さん達のコンロンの六〇〇〇m台未踏峰登山(期間:二九日間)

一人当たり保険料 七二六〇円

(C) 二〇〇八年の阪本公一さん達のネパ

ル・ヒマラヤ(ロールワリン)ラムドン・ピーク(五九二五m)登山(期間:四〇日間)

一人当たりの保険料 九〇七〇円

(四) 山岳登攀コース、軽登山コースのいずれのコースも山行中のみならず、日常生活でのケガも補償の対象になります。

(五) 期間は毎年四月一日から翌年四月一日午後四時までです。中途加入も受け付けられません。

### 二、加入の手続き

加入を希望する方は、必要事項を明記した加入申込書を、AACKの指定する山岳共済担当者(堀内潭様)に提出し、指定の銀行口座に会費を振り込んでください。

(一) 加入申込書には次の八項目を記入してください。(書式自由)。

① 氏名(フリガナ)

② 生年月日、満年齢

③ 郵便番号と住所(フリガナ)

④ 電話番号、FAX番号

⑤ 電子メールのアドレス(ある場合)

⑥ 職業名・職種名

⑦ 加入コース・タイプと海外山岳共済の追加希望

⑧ 同種の危険を補償するための他の保険契約があるか

⑨ 過去三ヶ年間に病気・ケガで保険金(五万円以上)を請求又は受領したことがあるか  
担当者の連絡先は次の通りです。できるだけ電子メールでお送り下さい。

堀内潭

(二) 保険料・会費の振込口座(申込みと同時に振り込んでください)

銀行:池田銀行 川西清和台支店

(店番号335)

口座番号:普通預金 7420

名義:AACK山岳保険 堀内潭

(読みは、ホリウチ フカシ)

(三) 年間を通じての保険加入の募集締め切りは三月二〇日(山岳共済事務センター着)です。従いまして、毎年三月一〇日までに担当者(堀内様)へ申し込みと会費振込みをしていただければ、四月一日から有効となるよう手続きをします。途中加入も可能で、この場合保険料は加入月数に比例して減額されません。詳しくは担当者にお尋ね下さい。なお、手続き完了の翌月に日本山岳協会から一般共済会員証が担当者へ送付されてきますので、担当者から本人に転送します。

### 三、加入者の山行・登山計画書の提出

加入者は山行時に次のことを守って下さい。

(一) 山岳共済の適用を受けるには、日帰りハイキング以外のすべての山行(沢歩き、岩登り、積雪期の登山、及びすべての泊まりがけの山行)で登山計画書を提出する義務があります。

(二) 登山計画書には次の事項を記入して下さい。

さい。

登山目的、日程、ルート、メンバーの氏名・年齢・住所・電話番号、留守本部、最終下山日、共同及び個人装備、食料(実働・予備日明記)  
(三) 登山計画書の提出先は阪本様です。できる限りワープロなどで作成したファイルを電子メールに添付して

へお送り下さい。できない場合は、下記の自宅へ郵送して下さい。

阪本公一宛)

(四) 下山後、阪本様へ速やかに電話やメールで下山報告をしてください。

(五) 阪本様が担当するのは登山計画書のとりまとめで、留守本部ではありません。留守本部は必ず山行計画者が自己の責任で決めてください。万一の事故発生時の捜索救援体制も、山行計画者が事前に検討しておくべきことであることをご承知ください。

(六) 登山計画書を提出しない方は次年度の加入をお断りします。

(七) 山岳共済に関する疑問点や、更に詳しい説明が必要な場合は、担当の堀内様にお問い合わせください。また、日本山岳協会のホームページにも説明があります。

<http://www.moon.sphere.ne.jp/jma-kyousai/index.html>

以上

## 会員動向

### 訃報

## 訂正とお詫び

前号(47号)の13ページ上段写真のキャプションのなかで、芳賀夫人の名前を「敦子」と誤記しました。正しくは「淳子」さんです(本文は誤りありません)。訂正してお詫び申し上げます。 編集子

## 編集後記

昨年11月に開催された「チョゴリザ初登頂記念シンポジウム」でご講演いただいた六人の方の講演抄録を本号にて掲載するためにその講演内容の執筆を依頼しておりましたが、どの方も超多忙。正月明けの最終締切に四人の方からなんとか原稿をいただくことが

出来ました。そこでこの項を二回に分け、今号を(上)編として上田豊会長の挨拶を加え三人の講演の抄録を掲載しました。さきいただいた平井一正氏の講演抄録や、クリンチ、ボナッティ各氏から送られてきたメッセージ、及び藤田耕史、松沢哲郎各氏の講演抄録は次号に(下)編として掲載する予定です。当日シンポジウムにおいてならなかった方にもその内容を知っていただき、A A C Kの業績の評価と共に当会の目指すべき方向を考えて行きたいと思っております。

ところで、今号も年金世代の元気な山行報告を三本掲載させていただきました。平均年齢七〇近いメンバーのラムドン・ピークの慎重な登頂行は聞くところによると、旅行費は年金程度であったそうです。安田隆彦さんは枯れ木(失礼)に花が咲いたように現役復帰。近くさらなる山行に挑戦されるそうです。OKAYANの山行に至っては参加者の平均年齢はどれくらいになるのでしょうか。くれぐれも事故のないようにと祈っております。次号の原稿締切は三月末日。(前田 司)

編集委員 前田 司

発行日 二〇〇九年二月末日

発行所 京都大学学士山岳会

製作

吹田啓一郎 気付  
京都市北区小山西花池町一八  
(株)土倉事務所